



歯学だより Vol. 8



2013 年

岡山大学歯学部
岡山大学大学院医歯薬学総合研究科 歯学系
岡山大学病院 歯科系 広報専門部会

目次

◇ 学部長より				
「歯学便りに寄せて」	岡山大学歯学部長	窪木 拓男	5	
◇ 副病院長より				
「歯考停止」	岡山大学病院歯科系代表副病院長	森田 学	7	
「臨床実習の潮流と課題」	岡山大学病院副病院長（歯科系教育・研究担当	宮脇 卓也	8	
◇ 副研究科長より				
「大学院医歯薬学総合研究科からの便り」	岡山大学大学院医歯薬学総合研究科 副研究科長	浅海 淳一	10	
◇ 退職・転出教員より				
「退職にあたって ～子どもの心に貯金をして帰す～」	小児歯科	岡崎 好秀	12	
「退職のご挨拶」	口腔顎顔面外科学分野	目瀬 浩	14	
「転出のご挨拶」	徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部咬合管理学分野	松香 芳三	17	
「転出のご挨拶」	日本大学松戸歯学部 解剖学Ⅱ講座	玉村 亮	19	
「転出のご挨拶」	川崎医科大学分子生物学Ⅰ教室(発生学)	片瀬 直樹	20	
「近況報告 @富士の国 山梨」	山梨大学大学院医学工学総合研究部解剖学講座細胞生物学教室	河田 かずみ	21	
「うどん県から赴任のご挨拶」	香川県厚生農業協同組合連合会 滝宮総合病院 歯科	藤澤 拓生	23	
◇ 新任教員より				
「医療支援歯科治療部准教授就任にあたって」	中央診療施設医療支援歯科治療部	曾我 賢	24	
「准教授着任のご挨拶」	インプラント再生補綴学分野	前川 賢治	27	
「昇任のご挨拶」	クラウンブリッジ補綴科	水口 一	29	
「着任のご挨拶」	スペシャルニーズ歯科センター	前川 享子	30	

- 「着任のご挨拶」 歯科矯正学分野 伊藤 慎将 31
- ◇診療科・研究科トピックス
- 「象牙質知覚過敏症についてみんなの家庭の医学に出演して」
むし歯科 歯科保存修復学分野 吉山 昌宏 32
- ◇学会のご案内
- 「第55回歯科基礎医学会学術大会ならびに総会のご案内」
口腔生化学分野 西田 崇 33
- ◇海外からの便り
- 「ミシガン州アナーバーより」 歯科矯正学分野 早野 暁 35
- 「ワシントン大学留学記～研究留学する意義～」
予防歯科学分野 入江 浩一郎 37
- ◇海外研修報告
- 「ハワイ大学医学部シミュレーショントレーニング研修に参加して」
歯科麻酔科 樋口 仁 39
- ◇留学生レポート
- 「岡山大学O-NECUS項目留学生（Okayama University O-NECUS Program Student）」
歯科薬理学分野 儀丹 (Yi Dan) 41
- 「留学生レポート」 生体材料学分野 Gulsan ara sathi 44
- 「美好的回忆（人生のいい思い出）」 口腔病理学分野 李 海婷 45
- ◇岡山歯学会論文賞受賞者寄稿
（奨励論文賞）
- 「岡山歯学会奨励論文賞を受賞して」 口腔外科（病態系） 栗尾 奈愛 47
- 「岡山歯学会奨励論文賞を受賞して」 口腔外科（病態系） 山本 大介 48
- （優秀論文賞）
- 「動物モデルからイノベーション」 予防歯科学分野 江國 大輔 49
- 「岡山歯学会 優秀論文賞受賞（臨床論文）を受賞して」
徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部 予防歯学分野 玉木 直文 51
- ◇学生より
- 「臨床実習を通じて」 歯学部5年 校友会副会長 福原 大樹 52

◇卒後臨床研修医より			
「岡山大学病院卒後臨床研修センター」	卒後臨床研修医	浦瀬 綾香	53
◇診療科・研究科の活動			
「ベストプラクティス賞最優秀賞を受賞して」	岡山大学病院 医療安全管理部	総合歯科 白井 肇	54
「周術期における口腔機能管理を具体的に考えるシンポジウム」開催	クラウンブリッジ補綴科	水口 真実・縄稚 久美子	56
「岡山大学歯学部同窓会卒後研修会2012」	インプラント再生補綴学分野	園山 亘	57
「サイエンスカフェ『口腔健康科学と科学芸術への誘い』の開催」	生体材料学分野	吉田 靖弘	59
「ミャンマーでの海外医療講演」	口腔外科（再建系）	水川 展吉	61
「ニンビン省総合病院における口唇・口蓋裂治療支援活動に参加して」	顎口腔再建外科学分野	松村 達志	65
「『中国・四国広域がんプロ養成コンソーシアムがん治療認定医（歯科口腔外科）養成インテンシブコース』および『口腔がん検診研修会』を開催」	口腔顎顔面外科学分野	岸本 晃治	67
◇卒後臨床研修センターより			
「研修歯科医のキャリアデザインを考える」	総合歯科	鈴木 康司	69
◇歯科衛生士室から			
「H24年度歯科衛生士室活動報告」	歯科衛生士室	三浦 留美・池田 尚子	70
◇技工室から			
「平成24年度技工室活動報告」	診療支援施設技工室	神 桂二	72
◇編集後記			74

「歯学便りに寄せて」

岡山大学歯学部長
窪木 拓男

国立大学歯学部の入学定員が全国一律53名にまで削減され、これ以上の定員削減はないものと思っておりましたが、人口の急激な縮小予測により、各大学（学部）のあり方の性格付けを模索する動きが加速しています。具体的には、全国の大学の旧帝大系大学を第一層の研究大学、その下の大学を同数程度、第二層の研究大学として選定し、重点投資をしようとするものです。また、これ以下の大学では、研究面での積極投資というよりは、地域のコミュニティの中核としてリージョナルセンターとしての役割を担いなさいという方向付けがなされようとしています。この研究大学の選定により世界大学ランキング上位にランクされる大学をなるべく多数作りだそうというのが、政府や文科省の願望です。これに用いられようとしているのが、ミッションの再定義という各学部の自己申告情報と文科省が独自に集約した教育・研究面でのデータベースです。自民党政権になり、さらにこの流れは激流となり、日本の大学の国際ランキングが低いことを急激に解決するために、大学生や大学院生の海外への派遣、海外から優秀な学生や研究者を呼び入れる施策がとられようとしています。それを可能とするために先日の安倍総理の発言にあったように、教員の給与の年俸制が導入されようとしています。つまり、日本の大学の閉鎖性から、新しいサイエンスのブレークスルーやイノベーションを起こさせることが難しいので、海外の優秀な研究者に助けを請おうというのです。しかし、十分な財政面での議論がなされていない現状で、海外の研究者の受け入れを進めるのはやや無理があるようにも思います。

このような動きに過剰に反応する必要はないかもしれませんが、研究大学としての立場を失うことは避けなければなりません。私の基にあるデータで現在の状況を分析してみようと思います。昨年度、科学技術政策研究所から大学ベンチマーキング調べという調査結果が報告され、臨床医学分野の研究の質と量についてまとめられています。これも第1層、第2層と命名されおり、文科省がこの資料を重視していることを伺わせます。これによると、第1層が「日本の研究活動の牽引役の大学」、第2層が「第1層を量・質ともにフォローする日本の研究活動の厚みに該当する大学」、第3層が「第2層の厚みを増加させるポテンシャルを持つ大学」と定義しています。また、質の指標に用いたQ値とは、論文数に占めるTop10%補正論文数（Top10%補正論文数とは、被引用回数が各年各分野で上位10%に入る論文の抽出後、実数で論文数の1/10となるように補正を加えた論文数を指す。）の割合（第1層：12%以上、第2層：9～12%、第3層：6～9%）であり、論文の量は、世界シェアの割合で分類しています。第1層には、東京大学、京都大学、大阪大学が含まれています。第2層には、東北大学、千葉大学、東京医科歯科大学、金沢大学、名古屋大学、神戸大学、岡山大学、九州大学、慶應義塾大学、順天堂大学、東海大学が含まれています。岡山大学が含まれているのは大変

有り難いことですし、中国四国では、岡山大学が唯一ランクインしています。歯学系に限ったデータはありませんので、安心はできませんが、臨床医学分野として見ると良い線をいっているようです。ただ、大学全体として見ると、第2層にランクインしていない分野・学部が多数あり、大変難しい状況です。例えば、岡山大学の科学研究費補助金採択総額は全国12位、13位のあたりですが、広島大学は9位といった具合に広島大学の健闘が光ります。また、最近では、各分野の中での被引用数を基準にした論文の質の評価が大変大きく取り上げられるようになりました。すなわち、インパクトファクターが高いというだけではなく、各分野に及ぼす実質のインパクトが高い、本物志向の論文を目指す必要があると思われまます。幸い、トムソンロイターの解析によると、岡山大学歯学部の歯学関連論文の平均被引用回数が全国トップで推移しており、この面でも時代にマッチした活動が行われていると言えそうです。

最近、臨床研究中核病院に岡山大学病院が認められました。これは、厚労省関連の大規模グラントになります。中国四国の大学の中で岡大だけが採択され、ガンプロ中核病院同様、中国四国地区の中核医療拠点として認められたことは我々にとって大変勇気づけられる成果です。今後、政権が変わらなければ、TPP参加によって、混合診療が認められる方向で議論がなされるかもしれません。新しい医療技術の有効性を試行する受け皿として、このような臨床研究中核病院が利用されることから、研究能力のある医療機関としての試行期間を頂いたと考えるべきかもしれません。医科歯科連携を通して、医療に本当の意味で貢献できる歯科医療人の育成機関として、さらに学部や大学院の歯学教育研究機能をブラッシュアップしていく必要を感じまます。

最後に構成員の方々に御願いたいことがあります。先生方が所属されている岡山大学歯学部もこのような大変厳しい競争的環境の中で、生き残りをかけて戦っています。各分野、各個人が、個々に、日本一、世界一を目指すのは当然のことですが、学部として一丸となって取り組むべき施策に関しても協力を頂きたいのです。すでに、ミッションの再定義やバイオフィォラムの実施では、将来構想検討WGメンバーのお力をお借りしています。さらに今大変重要と思われるのは、岡山大学歯学部が、世界レベルの中核教育研究機関との国際連携を持ちながら、アジアの中核研究機関として海外から留学生を引きつけることです。そのためには、時代にマッチした教育研究基盤の整備と国際戦略が避けて通れません。今年、滝川教授と松尾教授が御世話されます歯科基礎医学会と連動した形で、第三回岡山医療教育・研究国際シンポジウムを9月23日に開催予定です。テーマは、①歯学教育の国際認証、②医療支援・在宅介護歯学教育の推進、③歯学研究の再興です。名実ともに中国四国の拠点校として、臨床、研究、教育、社会貢献のどの点においても一目おかれる存在となれるよう、存分に先生方の力を頂きたいと思ひまます。楽しく世界に羽ばたきましょう。今が本当に頑張りどころなのです。

「歯考停止」

岡山大学病院歯科系代表副病院長
森田 学

歯科系代表副病院長としていろいろな場面で原稿を書かされます。しかも、一番忙しい時に、依頼メールが突如届きます。歴代の学部長や（副）病院長の先生方の苦勞がしのばれます。私は、早々にネタ切れで、あと1年間はこのややこしい役職を努めなくてはならないのですが、すっかり思考停止に陥っており、駄文で文字数を稼ぐしかできません。

少しは真面目に。まずは歯科系の診療報酬稼働額です。平成23年度、岡山大学の外来+入院の診療報酬稼働額は14.4億円でした。歯学部のある国立大学病院は全国に11箇所ありますが、第4位です。第3位の大学は15.0億円。「うーん あと6千万でベスト3、もう一息！」と一時は考えました。しかし、終わりのない競争に一喜一憂して息切れするのもどうかと、日ごろの弱気な性格が作用して、病院スタッフの皆様には程々に発破をかけてきたつもりです。

さて、平成24年度の診療報酬稼働額です。草食系の副病院長のいる病院にもかかわらず稼働額は伸びています。この原稿を書いているのは年度途中ですので正確にはお伝えできませんが、入院の稼働額が前年度と比較して大きく伸びました。頭頸部がんセンター、口腔がん専門外来などの充実がそれを後押ししています。また、平成25年1月には、遠隔画像診断の他、各種の専門的検査を通じて地域医療に貢献する「口腔検査・画像診断センター」が発足しました。一般歯科治療とは異なる難易度の高い治療を担い、毎日深夜まで働いておられる口腔外科を中心とした外科系の諸先生方に深く感謝します。これに対して外来の稼働額は前年度と同程度です。断っておきますが、外来の診療組織がサボっていたのでは決してありません。今のマンパワーでは、ほぼ限界に近いところまで達しているのです。

でも何か変。国としては医療費を削減したいはず。自分が担当する公衆衛生学の授業でも、年金と医療費の増加については国家的難題と講義しています。だから、「国立大学病院の中で岡山大学病院は最も歯科医療費が低い」とか、「日本のなかで岡山人は最も健康な歯・口で暮らしている」と胸を張って威張れるほうが本当はずっと素晴らしいのではないのでしょうか（もちろんこの紙面の話として下さい）。一体我々は何に向かって努力しているのでしょうか。県民の口の健康がどれくらい高まったのか、良い歯科医師を本当に養成できたかどうか、臨床を通じてどれ程の知的興奮が得られたのか、そのような尺度で自分達を評価しない限り、思（歯）考停止のレースを永遠に繰り返すだけです。

前向きな話題を。5月には総合診療棟の運営が開始されます。スゴイ！という以外には例えようの無い最新設備が揃っております。一見の価値がありますので、是非ご覧になってください。もちろん患者として行くことの無いように。歯科関連では、総合歯科のユニットをこれから3年かけて一新します。臨床実習の学生や研修医諸君は、納税者の事を考えて、くれぐれも大切にしてください。また図書館などの耐震改修などを含め鹿田地区は空前の工事ラッシュとなります。大型運搬車両が頻繁に出入りします。敷地内での交通事故には充分ご注意ください。

「臨床実習の潮流と課題」

岡山大学病院副病院長（歯科系教育・研究担当）
宮脇 卓也

歯科系教育・研究担当副病院長を拝命し2年がたちました。教育・研究担当としての具体的な主な役割としては、臨床実習実施部会長として歯学部学生の臨床実習の責任者であるということ、さらに病院での教育に関して主に、卒後研修歯科医の教育、コ・デンタルスタッフの教育を支援する立場にあります。卒後臨床研修については歯科部門長の鳥井康弘教授が全国有数の教育体制をとっておられ、また、コ・デンタルスタッフの教育については歯科衛生士室および歯科技工士室のスタッフの皆様が、それぞれ頑張っておられますので、私は少しお手伝いする、ささやかな役割があるのみです。しかし、第一の歯学部学生の臨床実習については、病院での教育と歯学部での教育とが重なるところであること、さらにここ数年、全国的に臨床実習が重要視され、これを充実させることが強く求められている状況にあるため、臨床実習実施部会長としての役割が大きなウェイトを占めています。

現在、私の知る限り臨床実習に関して全国的に2つの大きな「潮流」があります。一つは、国家試験が低い合格率であることに起因して、国家試験対策が過大になり、臨床実習が形骸化していることへの危機感です。もうひとつは、すでに医科で重要課題になっている「医師資格の国際認証制度への対応」が、歯科においても検討されてきている、という点です。

最初の国家試験対策と臨床実習の関係ですが、私の知る限り、多くの私立大学では5年生で臨床実習が終わり、残りの1年をかけて実質的に国家試験対策に準じた教育がされているようです。一方、国立大学は私の知る限り、6年生の前半まで臨床実習を行っており、その後、実質的に国家試験対策として自習させているところが多いように見受けられます。ただ、大学によっては6年生の12月に臨床実習の実技試験をAdvanced OSCEとして評価し、さらに国家試験の後も臨床実習を続けているところがあります。このような大学の卒業生と、9月までに臨床実習を終え、国家試験終了後自習している大学の卒業生との臨床能力の差が歴然としているのは明らかです。岡山大学歯学部はどうでしょうか？ 真の意味での「質」の高い卒業生を輩出できるように、臨床実習後を含めて教育体制を見直す必要があると感じております。

次に「国際認証制度」ですが、医科では臨床実習の充実がポイントであると考えられています。つまり、海外と比較して日本の臨床実習が十分でないということです。歯科ではまだ「国際認証制度」は確立されていませんが、私の知る限り、医科と同様に臨床実習の充実がポイントになりそうです。これに関して全国的なワーキンググループが立ち上がっており、岡山大学の窪木拓男学部長もメンバーに加わっておられます。この背景には、先の国家試験対策だけでなく、全国的に、いわゆる自験症例（実際に診療を行

うケース)を確保することが困難な社会環境があります。幸い岡山大学では診療参加型、つまり学生自身が医療面接を含め、指導教員のもとでの自験例が比較的多いですが、今後、先の「国際認証制度への対応」の推進によって、臨床実習の充実がこれまで以上に求められると考えられます。ただ、自験症例などのいわゆる「数字」を増やすことだけが目標ではなく、「考える力」も「国際認証制度」では求められていると聞いております。その点においても、岡山大学の臨床実習は充実しているのではないかと考えております。各診療科の指導教員の先生方のおかげですが、このままこの岡山大学歯学部の強みを維持していきたいと考えております。

臨床実習に関して全国的な具体的動向として、臨床実習にご協力いただく患者の「同意書の取得」、実技能力を客観的に評価するための「Advanced OSCEの導入」が急速に進んでいます。また、「臨床実習に関する患者様向けパンフレット」を作成して、臨床実習を広報している大学もあります。これらの点で岡山大学は遅れています。できるだけ早くこの遅れを取り戻すことが必要だと認識しております。

臨床実習の重要性のみを強調してまいりましたが、臨床実習は歯学部での学生教育の最終段階です。それまでの教養、基礎歯学、臨床歯学、基礎実習などが積み重なってこそ臨床実習の成果は得られるものです。たとえ臨床実習の期間であっても、基礎歯学を復習する必要があると思いますし、臨床実習の教員のみが学生の教育を担当するのではなく、全教員が岡山大学歯学部学生の教育に最後まで関わっていただき、「質」の高い卒業生を社会に送り出せることを願っております。

今後とも、皆様のご協力ご指導を下さるようお願い申し上げます。

「大学院医歯薬学総合研究科からの便り」

岡山大学大学院医歯薬学総合研究科 副研究科長
浅海 淳一



皆さまお元気でお過ごしのことと思います。副研究科長を引き継いでに就任して1年になるうとしています。このたび谷本光音研究科長が再任されることになり、私も引き続き副研究科長を続けることになりました。また、2年間よろしくお願ひします。

さて、この1年間この職に関わって思うことは、予算獲得の必要性とその難しさです。大学においては、文部科学省からの予算が減額される中、科学研究費の獲得とともに大型予算の獲得が望まれております。その予算投入が集中型の予算投入なため過当競争になっているのが実情です。いろいろな方面のから予算がありますが、3月現在においては博士課程教育リーディングプログラムの獲得に努力しています。この予算は平成23年から募集が始まり本年が最終年度に当たります。過去2回は残念ながら獲得するに至っておりません。どの募集においても同様ですが、アイデアはもちろんです、実績がものをいう部分があり、本件においてもグローバルCOEプログラムに採択されていることが非常に有利な条件になっているようです。このことは、各人のアイデアと共に実績の蓄積が必要であることを示していると思われれます。それゆえ、皆様にも学内はもとより、地方そして中央においての実績づくりをお願いしたいと思ひます。また、各種事業への応募時には積極的にご協力をお願いいたします。

次に、1年前にも報告しておりますおかやまメディカルイノベーションセンター(OMIC)に関してですが、分子イメージング技術を核とした産学官連携による医療産業の創成を目指しています。平成24年4月から稼働し、やっと軌道に乗ってきた感があります。各種分析機器が設備されています。一度OMICのサイトを訪問ください(<http://www.okayama-u.ac.jp/user/crc/index.htm>)。小動物用のin vivo CT system、PET system、SPECT/CT system、中動物用のPET/CT systemなどを整備しており、PET systemにおいては¹⁸F-FDGはもちろんのこと⁶⁴Cuなどのイメージングに関しても順調に機能してきています。このたび窪木学部長と榎本副研究科長の尽力により予算の獲得に成功しております。皆様の分野でも利用できる部分があると思ひますので、是非ご検討ください。

大学院におきましても、ここ数年様々な連携による取り組みが推進されています。連携大学院はその1つで、医歯薬学総合研究科におきましてもその推進に当たっています。上に挙げました分子イメージングに関連した岡山大学と理化学研究所は、連携大学院協定を結び、平成23年4月から医歯薬学総合研究科に分子イメージングに関する教育コースを開設しております。秋に短期集中型のコースを開設していることはすでにご存じで、

受講された方もいらっしゃると思います。理化学研究所に続いて、平成24年10月には国立感染研究所および国立長寿医療研究センターと連携大学院を設置し、連携先から客員教授を招いたり、連携先に研究員を派遣することによって、相互の研究あるいは人事の交流を促進しており、これによりそれぞれ名古屋、東京においても研究を行えることに繋がっています。さらに平成24年11月には医薬品医療機器総合機構と連携大学院協定が締結され、臨床試験や薬事に関する知識を習得した医療人材育成を目指しています。是非研究科ホームページをご参照ください

(<http://www.hsc.okayama-u.ac.jp/mdps/>)。皆様にも有用な情報が得られると思います。

大学においてもグローバル化が進んできています。岡山大学においても大学院講義を英語で行うことが進められています。大学によっては学部学生の講義も英語で行われているところがあるようです。これに関しては英語があまりできない日本学部学生50人と英語がまあまあできる外国人学部学生5人に対しての講義になり、賛否両論ありますが、避けては通れない、むしろいずれは推進していかなくてはならないことと考えられます。大学間連携共同教育も推進され、国公立の設置形態を超え、地域や分野に応じて大学間が相互に連携し、社会の要請にこたえる教育・質保証システムを構築したところを重点支援するという方針も打ち出されており、教育の質の保証と向上が望まれています。そういった中での岡山大学医歯薬学総合研究科の特性を生かし、地域そしてグローバルに貢献できるようすすむべき方向を考えなければならないようです。歯学教育認証に関しましても平成24年度から検討WGが編成され、3月初めにシンポジウムが開催されています。この認証システムもCBTやOSCEのように今後4～5年のトライアルを経て、導入されてくるものと思われまます。

このように学部教育、大学院教育におきまして加速的にいろいろなものが変動しています。岡山大学におきましてもしっかりした地盤を持ちつつもこの流れに遅れないよう頑張っていきたいものですね。

「退職にあたって ～子どもの心に貯金をして帰す～」

岡山大学病院 小児歯科 講師
岡崎 好秀

本年3月末で退職するにあたり一言ご挨拶申し上げます。
私が岡山大学に赴任したのは、昭和59年の春でした。小児歯科の前教授である下野 勉先生が来られるときに一緒に来ました。



当時は、子ども達の齲蝕が非常に多かった時代です。最初の医局旅行を行った土曜日、他の先生方は先に出発し、私が一人で初診当番をしたら、なんと15名もの初診の子ども達が来たことを覚えています。また夏休みなどの長期休暇は、朝8:30に診療室に入れば、お昼抜きで夕方の5時まで診療という状態でした。

しかし、どれだけ子どもが多くとも、泣かさなような治療を心掛けてきました。私は、子ども達を泣いたまま帰すことを“心に借金”をすると表現しています。泣いたまま帰すと、次に来たときはもっと泣きます。そして、いつの間にか来なくなってしまいます。これは良くないことです。だから診療が終わったとき泣いていたとしても、帰るときには笑顔で帰す。これを子どもの“心に貯金”をして帰すと言います。貯金をすると、次に来たときは今日より泣かなくなります。そして、いつまでも来てくれる患者さんになります。事実、社会に出て本人の健康保険証を持った元子どもが小児歯科を訪れることもよくあります。



さて現在、乳歯齲蝕は激減しました。乳歯齲蝕が減ると小児歯科が成り立たないと思われる先生もおられるでしょうが、それは考え方の問題です。小児歯科は、“小児期のみを診る”と考えるのではなく、“小児期から診る”と考えれば良いと思います。だから子ども達の心を考えながら診療する必要があります。

ところで、幼稚園や学校で子ども達の口を診ていると新たな問題が増えてきました。不正咬合や歯周病の低年齢化だけではありません。口をポカ〜ンと開けて口呼吸、唾液分泌量が減少、滑舌が悪い子ども達など言い出したらきりがありません。

不正咬合を例にとると乳歯なのに叢生、過蓋咬合、開咬などが増えています。永久歯の下顎前歯の叢生は、交換期にスペースがないから起こります。しかし乳歯は、最初の下顎前歯が生えてくるのに叢生になっています。これは舌機能の低下以外に考えられません。

私は多くの障害児を診てきました。障害児は、上記の問題を抱えているケースが目につきます。私は、口腔機能の未発達などのため、このような問題が出現していると思っていました。しかしこれが、健常な子ども達にも起こっています。これは、健常な子ども達が、本来発達すべきところまで達していないとすれば由々しき問題です。小児期に起こるわずかなひずみが、年齢とともに顕在化してきます。それ故、このような問題は、早期から取り組む必要があります。だからこそ“小児歯科は、未来を築く学問”だと思います。

ところで、私は少し早めに退職します。

不思議に思われる先生も多いと思いますので、すこし書き残しておきます。以前から 60 歳で退職し、日本中の学校を廻り、子ども達に歯や口のすばらしさについて話すという夢を描いて参りました。



またモンゴルでは、1992 年以来子ども達の歯を見続けてきました。食生活の変化などにより急激にむし歯が増え続けている彼の国で、昨年、モンゴル健康科学大学（旧：モンゴル医科大学）歯学部より客員教授を拝命し、現地での教育活動も行える立場を得ました。

このようなことを考え出すと、どうしても現状では時間的な問題が生じます。そこで現在の状態を続けるより、辞した方が 5 年後の伸び代が大きいと判断した次第です。すなわちパワーアップすることがそもそもの目的です。

これも皆様との出会いの中から、多くのことを学ぶことができたおかげだと思い感謝いたしております。

もちろん、今後も障害児の歯科診療を始め、他大学での講義（九州大学・奈良女子大学・富山大学）、さらには雑誌の連載や単行本の上梓も平行して行う予定です。（夏に「泣きの予防も予防の一つ」“クインテッセンス出版”を上梓予定です。とりあえず 5 年間、毎年 1 冊単行本を目標にしています。）

それでは、末筆ながら岡山大学の益々の発展と皆様のご健康とご多幸をお祈り申し上げます。またどこかでお会いいたしましょう。

Hp: 「口の中探検」 <http://leo.or.jp/Dr.okazaki/>



「退職のご挨拶」

岡山大学大学院医歯薬学総合研究科 口腔顎顔面外科学分野
目瀬 浩

この程、25年間お世話になりました岡山大学を退職することとなりました。今まで大変お世話になり、心より御礼申し上げます。退職後は縁あって平成25年4月より福山市民病院 歯科口腔外科に勤務することとなりました。微力ながら地域医療に貢献すべく粉骨砕身頑張っていきたいと思っております。



さて、私が赴任いたします福山市民病院は開院36年目を迎え、「安心と生きる力とやすらぎを」を福山市はもとより備後地域の皆さんに提供する公立病院として歩んできました。そして、2013年4月より歯科口腔外科が福山市民病院の27番目の診療科として新たに開設されました。私に与えられた使命は、「救急医療」と「がん医療」を二本柱とする当院

の「高度専門医療」機能の充実強化及び地域完結型の医療を担うこと。そして、次世代の医療従事者（歯科口腔外科医、歯科衛生士など）を育成することです。



(平成25年4月の増改築後の福山市民病院図)

歯科口腔外科の外来診療は2013年5月7日より増築棟（西館）（400床から506床に増床）が稼働すると同時に開始致します。外来診察室は西館1階に位置し、完全個室の診療室3部屋で行います（2部屋は診察用、もう1部屋はストレッチャーも入れることができる外来処置用に使っています）。当科の診療室の前には内科診察室が7部屋あり、その奥には外科・呼吸器外科、脳神経外科、産婦人科があります。当科の診療は一般歯科開業医（かかりつけ歯科医）との役割分担を明確にし、かかりつけ歯科医院で治療可能な、齲蝕・歯周炎・義歯などの治療は全身疾患を有する患者様などを除いて、原則行わず口腔外科的疾患のみを対象として治療を行っています。そのために紹介患者様のみ診療を行う完全紹介制をとりました（ただし、救急患者様はその限りではありません）。外来は月、火、木、金曜日の午前中が診察日となり、午後からは外来小手術をメインに行います。入院は西館4階に8床のベッドを有し、口腔がんを含め口腔外科的疾患に対し水曜・金曜日は中央手術室で手術を行います。当院の大きな特徴でもありますが、救急搬送される患者様の顔面外傷は非常に多く、私も日夜携帯電話ならびに院内PHSが手放せない状態で、特に夜中に電話が鳴るといつもビクッとしています。顔面外傷の患者様は夜中でも可能であれば麻酔医、救急医と相談し早期に手術（できれば24時間以内に）を行うようにしています。

また、数年前と比べ医療者のがん治療に対する考え方は、大きく変わってきました。いままでの「がんが治りさえすればよい」、「命さえ助かればよい」という考え方から、がんを上手に苦痛も少なく治す「治療の質重視」の考え方へとシフトしました。この考え方は急速に普及し、がん治療に従事する医師、看護師たちはがん患者が治療中から治療後まで、苦痛を少なく口から自然な形で食事ができるように支援して行く口腔ケア体制を評価しています。当科ではがん治療を受けられる患者様に対して積極的に専門的な技術をもつ歯科衛生士と協働して口腔ケア介入する体制を構築していきたいと思っています。

そして全身疾患をお持ちの患者様には総合病院であります当院の特徴を生かして各診療科と協力し安全に治療を行っています。



その他いろいろありますが、福山市民病院 歯科口腔外科は嫉妬されるぐらい大変魅力的な診療科であると自負しています。目標は大きく、岡山大学病院 口腔外科に負けないような診療を行い、患者様に当科を選んで頂けるような診療科にしたいと思っております。一度福山市民病院 歯科口腔外科へ来てみてください。総合病院である福山市民病院の医師（常勤医 126 名）を含め全病院スタッフが一生懸命患者様のため（All for Patients）に働いている姿を見てください。岡山大学病院とは違う活気に満ちあふれています。また、医局は共同医局になっていて、約 100 人の医師がそこに机を並べて勉強しています。（皆さんよく勉強します。ネットサーフィンしているような先生は皆無です。）初期研修医の先生たちは医局で縫合や内視鏡の操作なんかを黙々と練習しています。なかなか凄いです。それと、医局に隣接する図書室の蔵書は大変充実していて、私はよく図書室へこもっています。そこには図書室司書が常時いらっしゃって文献をお願いすると探してコピーまでして持ってきてくれます（朝お願して診療が終わって夕方医局に帰ってくると机の上に置いてあります）。これも患者さんがよりよい医療を受けることができるように、診療するスタッフが要求する医学・医療情報を提供するのが仕事ですと言われていました（本当に頭が下がります）。このような病院内もご案内しますので、ぜひ遊びに来て下さい。



最後になりましたが、岡山大学歯学部の益々のご発展をお祈り致します。

福山市民病院
 診療部次長 歯科口腔外科統括科長
 目瀬 浩
 〒721-8511 広島県福山市蔵王町5丁目23-1
 電話 (084) 941-5151 FAX (084) 941-5159

「転出のご挨拶」

徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部 咬合管理学分野
松香 芳三



岡山大学歯学部の方におかれましては、益々ご健勝でご活躍のこととお慶び申し上げます。この度、徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部 生体システム栄養科学部門 摂食機能制御学講座 咬合管理学分野教授を拝命し、2012年7月1日付けをもちまして異動致しました。一言ご挨拶申し上げます。

私は岡山大学歯学部三期生として入学し、楽しい学生生活を過ごしました。どなたもそうであろうと考えますが、同級生と再会すると若い頃にフラッシュバックし、楽しかった頃を思い出します。教養課程の頃は水泳に力を入れており、インカレで当時の日本記録保持者と同じレースで泳いだことは良い思い出になっています。当時の歯学部水泳

部顧問、歯科補綴学第1講座 山下敦先生に学問の重要性を教えられてからは勉学にも力を入れました。岡山大学を卒業後は山下先生の教室に大学院生として入局させて頂き、楽しく厳しい医局生活を送りました。当時の医局には、日本歯科医学会会長賞を受賞された山下敦主任教授、現大阪大学教授・次期日本補綴歯科学会理事長の矢谷博文助教授、接着の大家である近藤康弘講師、現岡山大学歯学部長の窪木拓男大学院生、その他にも優秀な先生が多数在籍されており、まるでオールスターチームでした。大学院生時代は矢谷先生の指導の下、顎関節症の疫学研究を行い、大学院卒業後は岩手医科大学教授に就任されました口腔生理学講座の北田泰之先生とともに咀嚼運動に関する基礎研究も行いました。

その後、窪木先生の紹介でUCLA口腔顔面痛科のレジデント（研修医）として、口腔顔面痛の臨床をDr.ClarkやDr.Merrillから習うとともに疼痛伝達メカニズムに関する基礎研究に関してDr.Spigelmanから指導を受けました。レジデント終了後はDr.Spigelmanの研究室でポスドクとして研究し、その研究成果から幸運なことにNIHグラントが採択され、そのおかげでUCLAの助教授に就任し、教育・臨床にも参画致しました。UCLA時代の経験も良い思い出です。

2005年に窪木先生に拾って頂いて、岡山大学に帰国できたことは本当にありがたいことであると深く感謝しております。日本に帰国してからは、好きなテーマの研究をさせて頂き、ボツリヌス毒素の疼痛治療への応用の取り掛かりとなる研究もスタートできました。これは医学部細菌学分野の小熊恵二名誉教授と知り合うことができたからです。また、徳島大学医学部神経内科の梶龍児先生はボツリヌス毒素を用いた治療の第一人者であり、徳島大学でのボツリヌス毒素の臨床応用は他の大学よりもハードルが低いことは非常に幸運なことです。

さて、新任地の徳島は日差しが強く、どこことなくロサンゼルスをおもいださせてくれます。また、大塚製薬・大塚食品や青色ダイオードで有名になった日亜科学・金ちゃんヌードルの徳島製粉などの企業はありますが、岡山よりも田舎です。そのためなのでしょうが、やさしい人が多く、誰にでも気軽に話しかけてくれます。阿波弁は関西弁を少し優しくした感じですが、少し戸惑う場面もあります。例えば、阿波弁ではいろいろな場面で「いけますか？」と尋ねられます。これは「大丈夫ですか？」という意味が多分に

含まれています。例えば、「咬み合わせはいけますか？」は「咬み合わせは大丈夫ですか？」であり、「明日の試験はいけますか？」は「明日の試験に対しての勉強は充分ですか？」という意味であろうかと思えます。驚くことに、その解答はいつも「いけます。」であり、「いけません。」と答えている人を拝見したことがありません。このことから阿波人は非常にポジティブであることが理解できます。また、徳島では多くの「まつか」さんに出会いました。「松家」さんと書きますので、「松香」とは少し違うのですが、これまで親戚以外に「まつか」さんに会ったことがなかった私には非常に新鮮で、松家さんに出会うとついつい話し込んでおります。

徳島大学は岡山大学と同じく国立大学なのですが、手続きや対応が異なることが多々あります。現時点ではその相違点に少しずつ慣れていくという状況です。過去の歯学だよりを拝読しますと転出された先生方は同様に大学間の相違を記述されていらっしゃるようですので、大学間で多少の違いは仕方がないものだと感じております。校風とか地域の風習の違いのようなものではないでしょうか。

現在私が所属している教室は徳島出身の先生が大半でありまして、阿波独特の優しい感じが教室にはあります。それらの先生とともに、今後はこれまでの研究を発展させるとともに、デジタルデンティストリーの発展、睡眠時ブラキシズムの解析、金属アレルギー解析、精神的ストレスと咀嚼の関連性の解明なども行い、臨床・教育に反映させていきたいと考えております。これらの研究や臨床は良く噛むことにつながり、人類の幸福に寄与することができるものと期待しております。

私がこれまで歩んできた道では多くの人との繋がりがあったから楽しく過ごすことができました。これからも人と人とのつながりの中で生活していくのであらうと感じております。今後も教育、臨床、研究に更なる情熱を注いでいく所存ですので、一層のご指導とご鞭撻を賜りますよう何卒よろしくお願い申し上げます。徳島にお越しの節には是非一声をかけて頂けますと幸いです。

2013年3月18日



「転出のご挨拶」

日本大学松戸歯学部 解剖学Ⅱ講座
玉村 亮

平成25年4月より日本大学松戸歯学部解剖学Ⅱ講座に赴任することになりました。岡山大学歯学部に入學して以来、20年以上過ごしてきた岡山を去るにあたり、日々寂寥の思いが増すとともに新天地での期待感を感じております。

大學卒業後は、口腔病理学分野に院生として入學、學位取得後は助教として、學生教育、研究、臨床（病理診断）業務に携わってきました。口腔病理で過ごした時間は、私にとって大変重要なものだったと思っております。永井教之名誉教授、長塚仁教授、辻極秀次准教授他、多くの方に感謝するとともに御礼を申し上げます。

教育、研究、臨床に関して個人的に思うところを簡単に述べたいと思います。まず、教育に関してですが、學生との直接的な交流は楽しい時間でありました。教育を行うにあたり講義や実習での學生の指導は当たり前のものであり、重要なことは、どのような學生を育てたいか明確な目標を定め適切な方法により行うことだと感じております。研究に関しては、これまで、齒原性腫瘍や口腔癌、また骨や齒の再生について行ってきました。一言で言い表すことは難しいですが、アイデア（ひらめき）と探究心が重要であると思っております。もちろん、研究を行う上での論理的思考や方法論、実践する技術など必要なものはたくさんありますが。臨床に関しては、診断業務はやりがいのあるものでした。口腔外科の先生方と個々のケースに関して直接お話することも多く、患者と直接接することはないものの治療への貢献を感じました。

さて、今回の赴任の話は松戸歯学部解剖学Ⅱ講座寒河江教授から岡山大学口腔病理学分野長塚教授にお話があり、熟考した結果お引き受けすることとなりました。正直、見知らぬ土地で一からスタートすることに不安を感じなくもなかったですが、松戸歯学部においても責務を果たして行こうと思っております。

松戸に関しては、まだまだ不勉強であり全国的に有名なものも少ないような気がしますがマツモトキヨシの本社があるようです。地理的には東京（上野）から快速で20分と結構都心に近く、また、職場からスカイツリーも（天気がよければ富士山も）みえます。近くにお越しの際には是非お声をかけて下さい。

末筆ながら岡山大学の皆様の今後の益々のご発展とご多幸を心よりお祈り申し上げます。



「転出のご挨拶」

川崎医科大学 分子生物学1教室(発生学)
片瀬 直樹

岡山大学歯学部の皆様におかれましては益々ご健勝のこととお慶び申し上げます。私は平成25年3月31日を以て岡山大学を退職し、4月1日からは川崎医科大学 分子生物学1教室（発生学）で助教を務めさせていただくこととなりました。

私は平成17年に岡山大学を卒業、平成21年に大学院医歯薬学総合研究科を修了して学位を取得後、博士研究員を経て同年7月より口腔病理学分野に在籍しておりました。岡山大学在籍中にお世話になりました口腔病理、口腔外科、歯科放射線科ならびに医学部 免疫病理／第一病理、腫瘍病理／第二病理、岡山大学病院病理部の先生方にこの場をお借りして厚く御礼申し上げます。

「歯学だより」に着任のご挨拶を寄稿させていただいたのがつい先日のように思われますが、在籍3年8ヶ月はあっという間の出来事でした。在籍中は臨床業務としての外科病理学に従事してきましたが、近年では実験病理学に興味の重心が移り、さらには歯科にこだわらずに広い視野で研究をしたいという気持ちが大きくなっておりました。新しい研究環境はこれまでとはやや専門の異なる分野となりますが、私にとってこれは大きなチャレンジであると同時にチャンスであると考えております。ドイツ語の諺にあるように、“Wer nicht wagt, der nicht gewinnt.”（挑戦しない者は、手に入れない）という気持ちで臨む所存です。

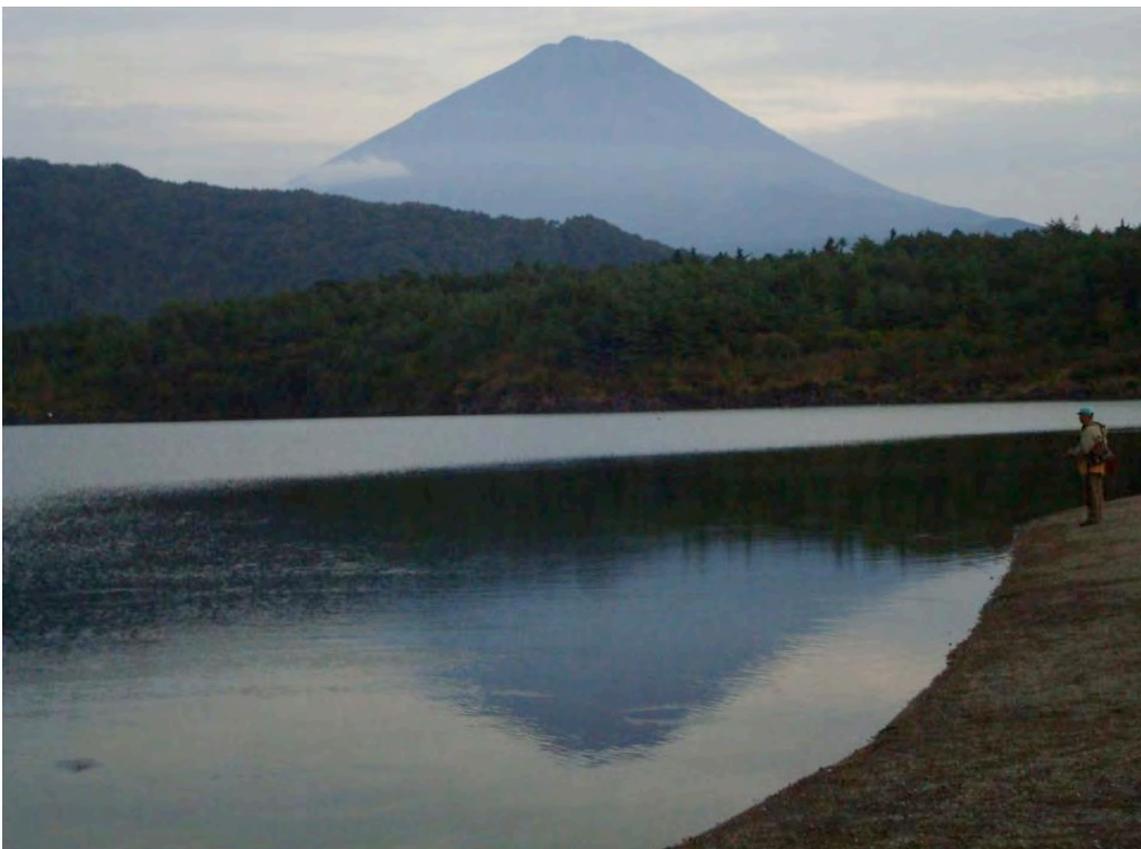
末筆ながら、転出のご挨拶の機会を与えて下さった「歯学だより」編集委員の先生方に御礼申し上げますとともに、岡山大学の皆様のご健勝とご多幸をお祈り申し上げます。

「近況報告 @富士の国 山梨」

山梨大学大学院医学工学総合研究部 解剖学講座細胞生物学教室 助教
河田 かずみ

岡山大学歯学部の皆様におかれましては、ますますご健勝のこととお喜び申し上げます。

私は2012年4月1日、山梨に引っ越してきました。最初に驚いたことは富士山が見えること。360°見渡す限り、尖った形をした標高の高いのだらう山々が見えるのですが、富士山の姿には、さすが霊峰といったものを感じました。そして次に驚いたことは夜が暗いこと。周りには何も無く、自動車運転免許取得後、約10年車を運転していなかった私が、車を持たなければならない。引っ越してきた当初は、とても心細い思いをしました。岡山はなんて住みやすい街だったのだろうと思いました。しかし、そのおかげで、星がとてもきれい。月の満ち欠けで夜の暗闇具合も変化することを知りました。

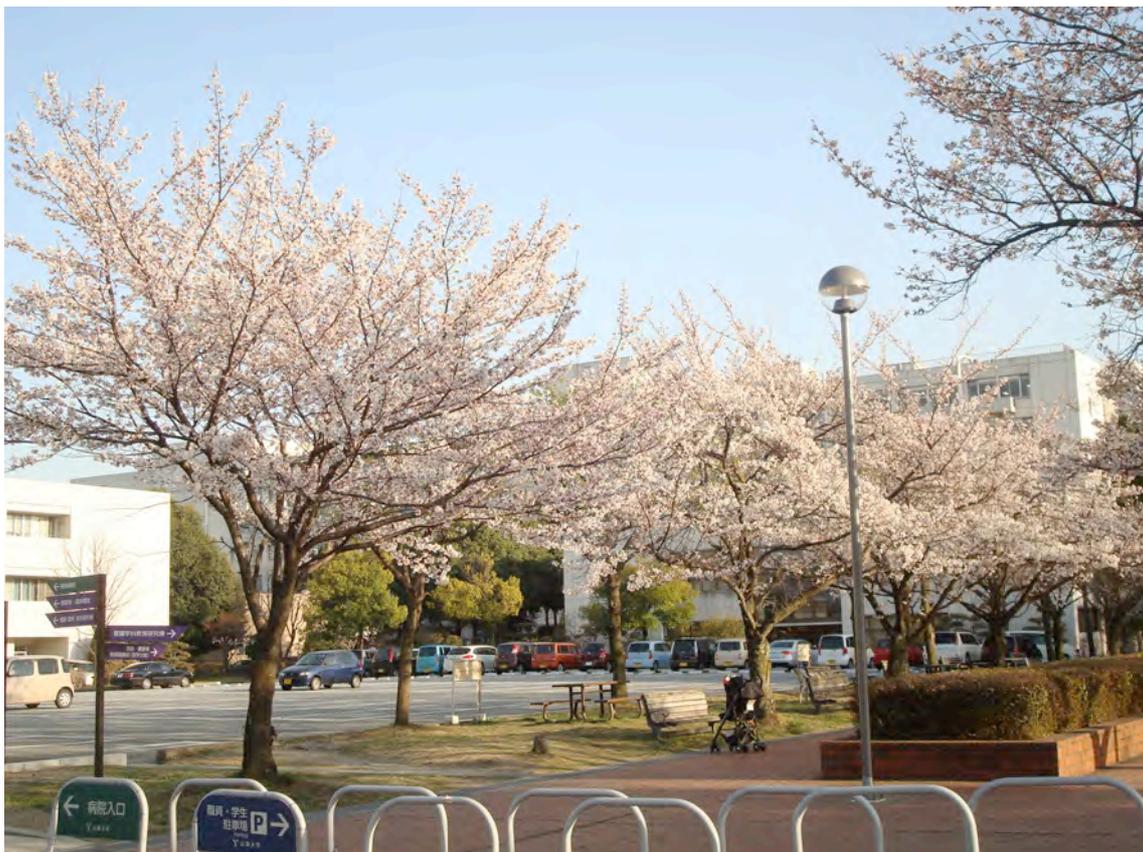


このような土地の医学部解剖学講座で私は勤務しています。それまでは岡山大学口腔生化学分野に所属していました。そのため、解剖学なんて、学部学生時代に1度習ったきりで、その後十数年遠ざかっており、記憶もほとんどありませんでした。しかし、実習日前日に当講座の教授直々のレクチャーを受けながら勉強し直し、実習日当日には医学部生に先生然として教えるという荒業も既に成し遂げました。感無量です。

解剖学を勉強し直し、改めて生命の奥深さ・尊さを感じました。様々なタンパク質が細胞を形作り、組織を形作り、そして、生命体を形作る。これの一端を解明するべく研究を行っていききたいと、強く思いました。

そんな私は、現在、「一次繊毛」について研究を行っています。一次繊毛は細胞外環境を感知するセンサーとして機能することが知られており、体を構成する殆どの細胞に存在します。一次繊毛の機能異常が起こると、「ブラックジャック」が鏡を使って手術を行った男の子、北斗神拳が効かなかった「サウザー」に代表されるような内臓逆位となります。このような一次繊毛が、象牙芽細胞にもあるのです。象牙芽細胞における一次繊毛が、どのような機能を果たしているのか、日々研究を進めています。岡山大学での経験と成果を基に、新たな研究を展開していきたいと思っています。

最後になりますが、この度、このような機会を与えて下さった編集委員の先生方にもお礼を申し上げます。また、滝川正春教授、皆木省吾教授をはじめ、数々のご指導、ご高配を賜りました諸先生方に、この場をかりて暑くお礼を申し上げたいと思います。まだまだ未熟者で、悪戦苦闘の毎日を送っていますが、日々精進していく所存です。今後とも、変わらぬご指導ご鞭撻のほど、何卒よろしくお願い申し上げます。



「うどん県から赴任のご挨拶」

香川県厚生農業協同組合連合会 滝宮総合病院 歯科
藤澤 拓生



岡山大学歯学部の皆様におかれましては、ますますご健勝のこととお慶び申し上げます。

2012年3月で岡山大学を退職しまして4月1日より香川県の滝宮総合病院に赴任いたしました藤澤拓生でございます。私は岡山大学歯学部10期生で、大学卒業後は当時の歯科補綴学第一講座（現インプラント再生補綴学分野）に大学院生として入局し、途中2年近くのドイツ留学も含め17年間お世話になりました。岡山大学在籍中はたくさんの先生方に熱心にご指導いただきまして大変感謝しております。この誌面をお借りして厚く御礼申し上げます。

さて、私の赴任いたしましたJA滝宮総合病院は香川県のほぼ中央に位置する綾川町という人口約25,000人の小さな町にあり、皆さんご存じないかと思いますが讃岐うどんの発祥の地で、「山越」や「田村」など有名店も近くにあります。訪れたことがある方はわかると思いますが田園風景が広がるのどかな街です。そんな田園地帯の中にぽつんとある滝宮総合病院は14診療科と検診センターを持つ香川県南部では唯一の総合病院として地域医療を担っています。歯科部門は一般の外来診療と医科の



入院患者のケアが主な診療業務です。お気付きの方もおられるかと思いますが、滝宮総合病院はJA（農協）がその経営母体ですので当然高齢な農協の会員の方が受診されることが多く、患者様の年齢層も非常に高いです。歯科の一日の患者様の平均年齢は、日によって違いますが70歳を超えることが珍しくないくらい高齢化の進んでいるところです。そういうわけで義歯をはじめ補綴治療をすることが多く、補綴科出身の自分としてはやりやすい環境で治療をさせていただいています。初めての外勤で慣れないことが多々あり悪戦苦闘の毎日を送っていますが、少しでも地域の皆様のお役に立てるようにと頑張っています。

最後になりましたが、岡山大学歯学部の皆様の益々のご健勝とご多幸をお祈り申し上げますとともに、このような貴重な機会を賜り、厚く御礼申し上げます。

「医療支援歯科治療部准教授就任にあたって」

岡山大学病院中央診療施設医療支援歯科治療部副部長・准教授
曾我 賢彦

平成24年10月に、病院長裁量で医療支援歯科治療部に准教授1名を配置することとなり、院内公募がなされました。公募文章によれば、「当該部署は、医科系診療科と連携し患者の状況に対応した専門的な歯科支援を行っており、それに関連する大学院ならびに学部における教育・研究を担当しております。当該部署の実質上の責任者として、中四国を代表する中核医療機関である岡山大学病院における周術期管理や医療支援活動をサポートする先駆的な歯科医療システムの構築を求められています。また、それに関連した、教育及び研究を強く推進できる人材を求めています。」とのことでした。

選考を経て、この度、平成25年1月1日付にて医療支援歯科治療部准教授に就任いたしました。就任にあたっての抱負を、この場をお借りしてご紹介させていただきたいと思えます。



1. 診療

1) 移植医療, がん化学・放射線療法等の高度医療における口腔内管理の実践とその発信

本院が展開する移植医療, がん化学・放射線治療において口腔内の感染管理, 機能管理等の歯科の専門性を活かすべく, 多くの歯科医師, 医師そして各種専門職の方々と活動し, 発信を行って参りました。引き続きこの活動を実践するとともに, 発信を推し進めます。

2) 周術期医療における口腔内管理の実践とその発信

平成20年の周術期管理センターの発足にあたり歯科部門長を拝命し, 多くの歯科系専門診療科の協力を得て, 質が高く, きめ細やかな周術期の口腔内管理を目指してきました。中央社会保険医療協議会における「周術期口腔機能管理料」新設の議論ではモデルとして取り上げられました。日本の医療の在り方に岡山大学発で一石を投じているこの活動をさらに推し進め, 発信を行います。

3) 院内連携, 病病連携および病診連携の推進

医療支援歯科治療部に必要とされる機能は、医科で展開される医療を理解し、それに幅広くかつ機動的に対応できる能力をもち、そして歯科が培ってきた専門性を発揮させるべく歯科各専門領域の専門医等とのコーディネートを行うことです。今後も院内の各診療科等との連携を推進します。さらに、病病連携、病診連携を課題とし、超急性期病院である本院の患者が後方支援病院に転院となった時の対応や、地域のかかりつけ歯科医との連携の充実を図りたいと思います。

2. 教育

1) 次世代を担う歯科医師を対象とした医療関係に関する教育

医療支援歯科治療部は、学生や研修医がチーム医療を研修させることができる絶好の場となります。そこで、2011年度から卒後臨床研修センター歯科研修部門の協力を得て、卒後臨床研修でチーム医療研修プログラムを開始したところです。医学部の早期見学実習の受け入れも開始しました。本年度からは卒前教育（臨床実習）にも関わります。多くの医学教育カリキュラムにおいて、プロフェッショナルリズムがアウトカムとして設定され、知識を与えることだけではなく心に訴えかけるような体験から学ばせる必要があると考えられています。実際に多職種連携医療の一員となり、「心に訴えかけるような体験」ができる教育カリキュラムを構築し、プロフェッショナルリズムを育むような教育を行います。

2) 地域の歯科医療職を対象とした研修制度の創設

全国的にがんをはじめとする高度な治療の一環として口腔内管理を導入する動きが始まっています。こうした歯科的な対応を効率的に行うためには歯科医療職を対象とした研修制度をつくり、病病あるいは病診連携を推進する必要があると考えます。関東圏では国立がん研究センターおよび日本歯科医師会による医科・歯科医療連携が開始され、講習会の開催と連携歯科医師認定制度が始まっています。地域の歯科医療職を対象とした研修制度をつくりたいと思います。

3. 研究

1) 病院医療支援を目的とした口腔の管理に繋がる臨床研究のさらなる発展と発信

私たち歯科スタッフと、医師そして看護師等の専門職との積極的な双方向性の協力の下、これまで多くの臨床研究をこれまで手掛け、発信して参りました。引き続きこのような研究活動と発信を続けます。

2) 病院医療支援を目的とした口腔の管理に関する研究会の設立

他大学病院や地域中核病院を中心に病院医療支援を目的とする診療部門が誕生しつつあります。岡山大学病院医療支援歯科治療部はこの分野において本邦で先駆的な活動を展開しており、共同研究や講演そして見学受け入れを通して他施設の実務者と交流する機会を得てきました。リーダーシップをもってこれらの方々との情報を交換する研究会を設立し、共同研究を行える環境をつくりたいと思います。

3) 国際交流と発信

Multinational Association of Supportive Care in Cancer/ International Society of Oral Oncology (MASCC/ISOO) というがんの支持療法、緩和医療を討論する国際学会があります。その大きなテーマの一つはがん治療における口腔内合併症対策です。私は学会機関誌 (Support Care Cancer誌) で複数の論文を発表してきました。平成22年に、日本学術振興会の事業でISOOの元会長

に受入研究者になって頂き交流する機会を得ました。その後、MASCC/ISOOのメンバーと親交を深め、共同研究やガイドラインの策定等の仕事に関わっています。交流と共同研究を通じて国際的な活動を引き続き実践します。

私の夢は、歯学が培ってきた専門性を活かして、病院等で展開される高度な医療の支援を目的とした口腔の管理学を打ち立てることです。エビデンスを伴った歯科医学知識はもちろんのこと、全身的な医学的知識、他職種との人間関係の構築能力、そして患者と接するにあたり、心理面でのサポート能力や患者の死生観に至る哲学的な理解までもが要求されると思います。これらを包括した「学」が打ち立てられればと思います。若輩者にすぐできる仕事ではありませんが、このような志をもって、医局員をはじめ、多くの方々の協力を頂きながら、職務に臨みたいと思います。

連携を主とする当治療部の活動は、皆様のご協力なしでは成り立ちません。今後ともお世話になります。どうぞよろしくお願い申し上げます。

「准教授着任のご挨拶」

インプラント再生補綴学 准教授
前川 賢治



この度、平成24年11月1日付けでインプラント再生補綴学分野の准教授を拝命致しました。このようにご挨拶をさせて頂く機会を与えて下さった関係の皆様深く感謝を申し上げます。また、これまで私を育てて下さった山下 敦名誉教授、矢谷博文教授、窪木拓男教授、Glenn Clark教授を始め、数々のご指導を賜った諸先生方にこの場をお借りして厚く御礼を申し上げます。

このご挨拶で何について述べるかいろいろと考えましたが、よく、学生さん達と話をしている際に、どうして今の道を選んだのか、開業などは考えたことはないのかということをお聞きします。学生さん達からみると、一般的な歯学部卒業後の進路は、遅かれ早かれ開業して自分の医院を持つことであり、ある程度大学への在籍期間が長くなってくると、どうして開業しないのかと不思議に思うのでしょうか。これまでそのようなことを尋ねてきてくれた学生さんには、自分の歯学部学生時代から大学院時代、その後のお話などをさせて頂く機会もありました。しかし、現在の学内では、私自身が学生だった時代からご存知頂いている方は殆どいらっしゃらなくなっていることもあり、この機会に私がこれまで岡山大学歯学部にお世話になってきた経緯について、自己紹介も含めて記載させて頂こうと思います。

私は大学入学までの18年間を山口県で過ごし、歯学部9期生として岡山大学に入学致しました。歯学部での6年間、様々な個性をお持ちになられた多くの指導教官にお世話になりながら、自分とはとにかく臨床がしたい、一般歯科臨床の知識と技術を身に付けるにはどの道に進むのがベストかということをお考えながら過ごしていました。5年生の臨床実習が始まって2ヶ月ほどしか経っていない時点で、あっさりとした決断した卒後の第1歩は、山下 敦現名誉教授が主宰されていた歯科補綴学第一講座への入局でした。最も厳しい環境で自分を鍛えてもらおうという希望のみでなく、当時の教室では顎関節症の咬合再構成治療や接着ブリッジなど新しい臨床技術がたくさん輩出されており、普通の歯科医師にはない臨床の強みを身につけることができるのではないかと考えたからでした。その後、大学院に入学しながらも、開業志向でなんとなく1年間を過ごした自分に大きな衝撃を与えて頂いたのが、その時にUCLAでの留学生生活を終えてロサンゼルスから帰国された、当時の窪木拓男講師でした。研究面で直接の指導を賜ることができ、研究計画の立案から手解きを頂き、研究結果の国際学会での発表、論文採択と自分の努力が実際に目に見える形となることを繰り返しているうちに、いつの間にか研究の面白さにはまってしまっていました。学位の研究テーマは、頭頸部慢性筋痛の発症メカニズムを交感神経系の機能異常や筋組織内血管調節機構の失調の観点から紐解くというものでしたが、大学院卒業1年後に文部省在外研究員として派遣された、UCLA歯学部Oral Medicine and Orofacial PainのGlenn Clark教授のもとでは、学位の研究をさらに発展させ、慢性筋痛の病態にアドレナリン受容体機能異常が関与している可能性

を見出すことができたことなど、充実した留学研究生生活を過ごさせて頂きました。15ヶ月間の留学から帰国した後は、当時の講座内の年齢構成が非常に若かったこともあり、すぐに学生実習のライター長に抜擢いただき、長きに渡りクラウンブリッジ補綴学の基礎実習の責任者として、教育の重責を担って様々な経験をさせて頂いてきました。また、病院が医科と統合した直後の皆木省吾歯科系代表副病院長のもとでは、歯科系総医局長として、佐々木朗歯科系代表副病院長のもとでは歯科系総外来医長として病院運営を現場から支えるポストを頂き、ここでも現在の自分にとって貴重な経験を多くさせて頂いたことに感謝しています。

このように、私が岡山大学歯学部に入學してちょうど25年が経過しようとしているこれまで、学生時代のみならず、教員となった後にも岡山大学歯学部、岡山大学病院では多くの諸先輩方に貴重な経験、ご指導を頂いて育てられてきたと自覚しております。今後も変わらぬご指導、御鞭撻を頂けますことを心よりお願い申し上げます。また、自分がこの岡山大学歯学部 に在籍している間に、これまでの御恩をお返しできるよう、出来る限りの努力をしていく所存です。今後ともよろしくお願い致します。

「昇任のご挨拶」

クラウンブリッジ補綴科 講師
水口 一

この度、2012年5月1日より岡山大学病院 クラウンブリッジ補綴科の講師を拝命いたしました水口 一です。今回このようなご挨拶をさせて頂く機会を与えて頂きました歯系広報誌の編集委員長はじめ関係の皆様へ深く感謝申し上げます。

私は、1995年に岡山大学歯学部を卒業後、歯科補綴学第一講座に大学院生として入局致しました。大学院生時代は、山下 敦教授をはじめ矢谷博文助教授、窪木拓男講師、松香芳三講師や多くの医局の先輩方から臨床、研究、教育だけにとどまらず、人としての生き方に至るまで数多くのことを教えて頂きました。今思えば、これらの偉大な先生方と出会うことができたこと、その上直々に教えを請うことができたことは、私の人生における最大の財産と言えます。現在の私があるのも、卒直後の多感な時期に多くの立派な先生方から教えを賜り、刺激を受けたお陰と今でも感謝しております。

大学院卒業後には同講座の医員、助手、助教にご推挙いただき、現在に至っています。この教員時代には、文部科学省在外研究員として米国カリフォルニア大学ロサンゼルス校歯学部ならびに南カリフォルニア大学歯学部へ長期の出張をさせて頂きました。この出張中には、Glenn T. Clark教授にお世話頂き、大学院時代からの研究テーマである顎関節症だけでなく口腔顔面痛、睡眠時無呼吸症候群、睡眠時ブラキシズムに関する非常に貴重な臨床、研究に携わる機会を得ることができました。これにより、現在では補綴科外来での一般補綴治療に加え顎関節症・口腔顔面痛み外来の一員として、顎関節症や口腔顔面痛を訴える患者、睡眠時ブラキシズムや閉塞性睡眠時無呼吸症の患者の診療にも従事する機会を頂いております。また教育面では、臨床参加型実習でのインプラント再生補綴学分野のライター長として診療

室だけでなく、日々学生と術前術後のディスカッションを交わし、少しでも補綴学を理解してもらおうと微力ながら額に汗しています。

また研究では、睡眠時ブラキシズム検査の臨床応用ならびにそのメカニズム解明を目指して、大学院生と共に悪戦苦闘しています。

今回、主任教授の窪木先生の方ならぬ御厚情により、またこれまでの多くの先生方の御指導や後輩達のご支援により、昇任させて頂いたことを改めて感謝いたします。

今後は、これまで勉強させて頂いた岡山大学歯学部や患者様、学生に何らかのご恩返しを行いたいと思います。そのためにも一層精進する所存ですので、今後とも皆様の御指導、御鞭撻を宜しくお願い申し上げます。



「着任のご挨拶」

スペシャルニーズ歯科センター
前川 享子

このたび、平成25年4月より岡山大学病院スペシャルニーズ歯科センター助教に着任いたしました、18期生の前川（有岡）享子と申します。

私は、4歳まで東京、小学校4年生まで大阪ですごし、その後岡山に引っ越してから現在まで、ずっと岡山で生活しています。

平成9年に岡山大学歯学部に入學し、卒業後1年、現スペシャルニーズ歯科センターである特殊歯科総合治療部第一総合診療室の研修医として勤務しました。ちょうどそのとき、当診療室に摂食・嚥下部門が新設され、これまで授業でもほとんど学んだことのない摂食・嚥下リハビリテーションの分野にふれることとなりました。障害児、者の歯科治療を学びつつ、摂食・嚥下についても見学などをする機会が得られ、食べるという普段何気なく行っていることがとても複雑な仕組みに支えられていること、食べる事が困難な患者さんは非常にたくさんいらっしゃる事を知り、そのリハビリや支援を歯科医師ができるということに感銘を受けました。1年の研修期間終了後、摂食・嚥下リハビリテーションについてさらに勉強するために大学院に進学し、平成20年に無事修了後現在まで、当科で外来、入院患者の摂食・嚥下リハビリテーションを行っております。また、その他隔月で開催している勉強会や、摂食・嚥下リハビリテーション従事者研修会初級・上級コースのお手伝いなどもさせていただいております。

個人的には、平成21年に結婚、23年に息子が生まれ、育児、家事と仕事に追われる日々を過ごしています。なかなか息の抜けない日々ですが、短い期間ですのでこの勢いで楽しみつつ頑張っていくつもりです。

4月からは臨床・研究とともに、教育という新たな責任が加わってまいります。学生と話をする、摂食・嚥下という分野に興味を持っている学生も多く見受けられます。これからは教員として、学生の興味を伸ばし、主体的に学ぶことができるようにサポートしていきたいと考えています。

今後ともご指導・ご鞭撻賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。



「着任のご挨拶」

歯科矯正学分野
伊藤 慎将

平成24年5月より、岡山大学大学院医歯薬学総合研究科・歯科矯正学分野の助教を拝命いたしました、伊藤慎将と申します。今回このような御挨拶の機会を与えて下さいました皆様に、深く感謝申し上げます。

私は、岡山大学歯学部21期生であり、平成18年に同学部を卒業しました。その後、必修化された研修医1期生として岡山大学医学部歯学部附属病院・卒後臨床研修センターにて、1年間の研修医生活を送りました。伸び伸びとした研修医生活を送りながら、次の舵を大学院、歯科矯正学分野へと向けたのでした。決して明確な到達点を見定めていた訳ではなく、むしろそれが無かった、あるいは欲しくも無かったが故にふわっとその方向へ行ってしまった、という感じに近いと、今改めて振り返りながら思っています。

4年間の大学院生活では、山城隆教授の御指導の元、歯科矯正学について学びながら、基礎研究は口腔生化学分野・滝川正春教授の元で、CCN2トランスジェニックマウスを用いて研究を行ってきました。

唐突ですが、かつて高校時代、美術室で油絵の具や木炭にまみれながら、ライバル達とともに芸術の道を志したことがありました。キャンパスの中に自分の表現を構成することに没頭していた私にとって、色鮮やかに染色が施されたマウスの組織像は、強烈な印象を与えるのに十分でした。DNAの指令によりカタチ創られた種々の細胞の集まりは、決して人の手で描けるモノではありません。無駄無く理路整然と配列する細胞、集団とタイミングを謀ったかのようにカタチを変え、時に周囲と競い合い、侵食していく。そして、そのメカニズムの解明もまた、私の心をざわつかせました。

気持ち悪い方向へ脱線したので話を戻しますが、大学院時代には、諸先生方の多大な御指導・御高配の結果、数々の国内学会での発表に加えて、国際学会でも何度か発表の機会を得ました。国際学会で発表と偉そうに申しましたが、実際結果は散々…思い出す度、顔から火が出るものでした。しかし、いつかのリベンジを果たすべく、今後も努力を重ねていく所存です。

また、歯科矯正臨床においては、日本矯正歯科学会認定医資格を取得し、後輩の大学院生を指導する立場となりました。かつて指導を受ける立場にいた自分が、諸先輩方にかに生意気な口をきいていたか、猛省しております。

若輩ゆえ、と諸先生方に助けていただき、また私をこの席へと導いて下さった御恩を忘れず、今後益々、臨床・研究・教育に精進し、研鑽の日々を送っていきたいと思います。末筆ながら、今後とも一層の御指導、御鞭撻を賜りますよう、宜しく願い申し上げます。



「象牙質知覚過敏症についてみんなの家庭の医学に出演して」

むし歯科 歯科保存修復学分野 教授
吉山 昌宏

私共の診療科であるむし歯科では、エナメル質・象牙質う蝕や歯髄炎、歯周病といった幅広い歯科疾患を治療していますが、その中でも最近大変患者が増加しているのが象牙質知覚過敏症です。最新の調査では、一般歯科を訪れる外来患者10人中3人が象牙質知覚過敏症を有していたことが判明しています。その原因としては加齢により歯肉が退縮したりエナメル質が咬耗して象牙質が露出して象牙細管が多数開口することがあげられますが、国民の90%以上は象牙細管の存在を知らないという驚きの事実があります。そこで最近、私は市民公開講座やテレビ放送の健康番組などでこの象牙細管の存在を知ってもらう活動をしています。去年12月にはNHK総合「ためしてガッテン」に続きテレビ朝日「みんなの家庭の医学」に出演してビートたけしさんの司会の下に、松本伊代さんやうつみ宮土理さんなどに象牙細管の様子をVTRをまじえて説明することができました。さらに、GC社の協力の下に唾液がいかに酸性飲食物を中和する力があるかをわかりやすく説明しました。咬耗や酸蝕、知覚過敏は欧米では「Tooth Wear」という用語でまとめられ疫学調査などもかなり進んでいます。日本でも「第三の歯科疾患」として注目されつつあり、わがむし歯科外来においても多くの患者のために治療や予防を積極的に展開しております。



2012年12月11日
テレビ朝日系放送

～たけしの健康
エンターテインメント！
みんなの家庭の医学～

「第55回歯科基礎医学会学術大会ならびに総会のご案内」

口腔生化学分野
西田 崇

みなさん、こんにちは！このたび滝川会頭、松尾準備委員長はじめ歯学基礎系分野を中心に岡大歯学部全体が一丸となって平成25年9月20日（金）から22日（日）までの3日間、岡山コンベンションセンターにおいて第55回歯科基礎医学会学術大会ならびに総会を開催します。岡山で開催されるのは1992年の第34回学術大会以来なので、なんと21年ぶりです。この20年間は医学・生命科学研究が劇的に発展した期間であり、それに伴い歯科基礎医学の各分野も大きく躍進しました。そこで、今回の学術大会は未来の歯科医療を切り拓いていくために歯科基礎医学がこれまでにどのように歯科医療に貢献してきたか、また、これからどのように貢献できるか、さらに、歯科基礎医学から得られた成果を如何に臨床に橋渡ししていくかを改めて問い直す狙いから、「未来の歯科医療を拓く歯科基礎医学」をメインテーマに掲げ、様々な魅力あるプログラムを企画しました。特別講演の講師には海外の著名な歯学研究者であるBjorn Olsenハーバード大学教授とIrma Thesleffヘルシンキ大学教授にお願いしました。また、シンポジウムには我々岡山大学が企画したものの他に日本学術会議が主催するものや、歯科基礎医学会が主導して行う学術シンポジウムもあって、非常に盛り沢山の内容です。さらに、ランチオンセミナーやサテライトシンポジウムなどもとても充実しています。

しかし、学術大会の真の主役はやはり、本学術大会に参加し、発表していただける先生方の一般演題だと思っておりますので、一人でも多くの会員の先生方や臨床分野あるいは歯科理工学分野の先生方にご発表、活発な討論を行っていただき、本学術大会を多いに盛り上げていただけることを切に願っています。また、会員の先生方にとっては臨床分野や歯科理工学分野の先生方との積極的な情報交換はこれまでになかったことですので、この機会に是非多くの会員の先生方にも参加していただき、自身の研究成果が如何にすれば社会に還元し得るか新たな着想の機会に本学術大会を利用していただけたらと思っております。特に若手研究者の先生方には自身の研究の成果と最終目標を再度確認して頂ける良い機会になると思いますし、優れた演題発表は優秀ポスター賞として表彰もされます。また、将来の歯科基礎医学を担う人材養成の期待を込めて、学部学生ポスター発表も企画されています。優れた演題には優秀学生ポスター賞として表彰されますので、歯科基礎医学に興味を持つ学部学生にも積極的に参加を促して頂けると幸いです。

一般演題の申込締め切りは平成25年5月31日正午ですので、積極的に演題登録をして頂きます様よろしくお願い致します。本学術大会は絶対に会員の先生方のみならず、歯科理工学分野の先生方、さらには実際の歯科医療に携わる臨床分野の先生方にも有意義な学会になると信じていますので、多数の先生方の参加をお待ちしております。

以下、参考までに第55回学術大会のプログラムを掲載します。なお、詳細はホームページ

<http://www.kokuhoken.jp/jaob55/program.html>をご覧ください。

1) 学術大会プログラム

(1) 特別講演

「Stem and progenitor cells for tooth renewal」

Prof. Irma Thesleff, University of Helsinki

「Vascular endothelial growth factor controls formation and homeostasis of bone」

Prof. Bjorn Olsen, Harvard School of Dental Medicine

(2) シンポジウム

●シンポジウム（岡山大学企画）

「Biodental Engineering ～バイオ研究と材料科学の融合～」

オーガナイザー：松本卓也 先生

（岡山大学大学院医歯薬学総合研究科生体材料学分野）

辻 孝 先生

（東京理科大学・総合研究機構、同大学院基礎工学研究科）

「オーミクスから彫塑する疾患像」

オーガナイザー：大原直也 先生

（岡山大学大学院医歯薬学総合研究科口腔微生物学分野）

久保田聡 先生

（岡山大学大学院医歯薬学総合研究科口腔生化学分野）

「口腔領域の疼痛：臨床家の視点を交えて」

オーガナイザー：杉本朋貞先生

（岡山大学大学院医歯薬学総合研究科口腔機能解剖学分野）

松香芳三 先生

（徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部咬合管理学分野）

●日本学術会議主催シンポジウム

テーマ「高齢社会における Oral-Systemic Medicine」

コーディネーター山口 朗先生

（東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科口腔病理学分野）

シンポジスト：清野 裕 先生、西村英紀 先生、宇田川信之 先生

●歯科基礎医学会主導型学術シンポジウム

テーマ：「バイオイメージングの最前線－歯科基礎医学研究を照らす新しい光－」

コーディネーター：谷村明彦 先生

（北海道医療大学歯学部薬理学分野）

飯村忠浩 先生

（東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科口腔病理学分野）

シンポジスト：永井健治 先生、今村健志 先生、上岡 寛 先生、原田英光 先生、根津顕弘 先生

(3) サテライトシンポジウム

(4) 一般演題（口演発表・ポスター発表）

(5) 部門別談話会

(6) 各賞授賞式・受賞講演

(7) ランチョンセミナー

(8) 会員懇親会

重要日程

演題申込締め切り：平成 25 年 5 月 31 日（金）

事前参加登録締め切り：平成 25 年 7 月 19 日（金）

「ミシガン州アナーバーより」

歯科矯正学分野
早野 暁

アメリカ合衆国、ミシガン州アナーバーで留学生活を送っております、21期生の早野暁と申します。よろしくお願ひ致します。私は2006年に岡山大学歯学部を卒業し、臨床研修を経て、現歯科矯正学分野に入局しました。大学院卒業後、矯正歯科医員として、また、2012年6月からは歯科矯正学分野助教として勤務させて頂きました。

その後、岡山大学大学院医歯薬学総合研究科ITP(International Training Program)からの援助を受け、University of Michigan school of Dentistry, Department of Biologic and Materials SciencesでVisiting Scholarとして研究しております。

現在の研究テーマは頭蓋縫合早期癒合症(craniosynostosis)です。これは頭蓋縫合が早期に癒合して、頭蓋変形、頭蓋内圧亢進などを引き起こす疾患で、Crouzon, Apert, Pfeiffer等様々な症候群と併発することも知られています。アジア人における発生率は欧米に比べ低いですが、世界的には2500人に1人と高い割合で見られる疾患です。原因遺伝子のいくつかは既に発見されていますが、それらの遺伝子が原因とされるcraniosynostosisは全体の2,3割程度とされており、遺伝学的背景は未だに多くの部分が不明です。臨床においても、この疾患に対する治療は外科的な頭蓋骨拡張術が主であり、症候群性の場合、複数回の手術が必要となることもあります。

私の所属する研究室ではbone morphogenetic protein (BMP)に焦点をあて、craniosynostosisの研究を行っており、その中で私は原因となる特定分子の解明と、nanostructured polymers (NSP)を用いた新たな治療手法の開発に携わっております。



アナーバーは、自動車産業が盛んなデトロイトから車で40分程の場所にありとても静かで平和な街です。また、ミシガン大学は世界的に高い評価を得る大学で、非常に大きな規模の総合大学です。アナーバー市内にセントラル、ノース、サウスの3つのキャンパスがあり、私が通うセントラルキャンパスは街の中心部に位置し、繁華街と大学の施設が混在しています。大学のシンボルマークである“M”マークを街の至るところで見かけ、街と大学の一体感を感じます。キャンパス内は緑も多く、また歴史を感じる荘厳な建物が立ち並び、ここで3万人以上の学生が充実したキャンパスライフを送っています。

こちらに来てまだ日も浅いため、現在は新たな環境に順応することに必死ですが、日々刺激を受けながらの充実した留学生活を送っております。

最後になりましたが、留学する機会を与えて頂きました山城隆教授、上岡寛准教授、川邊紀章講師をはじめ岡山大学の先生方、そして、留学をサポートしていただきましたITPの先生方に深く感謝いたします。

「ワシントン大学留学記～研究留学する意義～」

予防歯科学分野
入江 浩一郎

現在、米国ワシントン州シアトルにあるUniversity of Washington (UW)、Department of PeriodonticsでSenior Fellowとして研究に従事しています、21期生の入江 浩一郎と申します。研究留学という念願が叶い、岡山大学歯学部の皆様方、特に医局の方々には大変お世話になり、この場を借りまして改めて感謝申し上げます。今回留学に関する報告をさせていただく機会を得ましたので、これまでの経過などを含め報告させていただきます。

2006年に岡山大学を卒業し、京都大学医学部付属病院歯科口腔外科にて初期歯科研修医を終了後、岡山大学大学院医歯薬学総合研究科予防歯科学分野に大学院として進学しました。今思えば、私達の学年前後がちょうど歯学部の変革のときだったように思います。チュートリアル、3年次のODAPASそして大学院に進学するきっかけとなった研究室配属、5年次のOSCE、CBTと色々な時代の変化を体験し、さらに私達の学年から初期歯科研修医義務化が始まりました。大学院卒業後、医員を経てワシントン大学に留学する機会を得る事ができましたが、ここまでの道のりはなかなか思うようには行きませんでした。留学先を見つけようと、興味がある分野のラボにポスドクとして雇ってもらえないかと、かなりの数のアプライをしましたがかなかなか雇ってくれるラボは見つかりませんでした。英語の苦手な日本人を、雇用をしてもらうのは厳しいと思い、応募可能な国内で募集している留学助成金を見つけては応募していました。幸運なことにある財団から留学助成金を獲得できたので、何とかポストを見つけ現在に至っています。

シアトルは、アメリカ北西部にある都市で、カナダとの国境まで約180kmの近さです。夏は涼しく冬も緯度（樺太と同じくらい）の割には寒くなく岡山と気温は同じくらいです。ただ、秋から春にかけては雨がが多く、この時期に鬱病になられる方が多いそうです。またボーイングをはじめ、マイクロソフト、アマゾン、スターバックスなどの大企業の誕生の地として知られています。そのため、州自体はかなり裕福で高所得者層が多いそうです。ちなみに、ビルゲイツさんの家は観光名所になっています。そしてシアトルといえば、イチローが所属していたシアトルマリナーズが有名だと思います。残念ながらイチローは去年の9月にヤンキースに移籍したのですが、一番印象に残っているのはマリナーズ対レンジャーズの試合です。電光掲示板にはイチロー、川崎、そして先発は岩隈、ダルビッシュと4人もの日本人選手の名前が映し出された時は、日本人として誇りに感じました。

さて生活面ですが、シアトルは西海岸にあるため日系企業も多く進出しており、かなりアジアの文化が浸透していると思います。通学の際、バスの中で5割以上はアジア系が占めていることがしばしばあります。また、妻がワシントン大学病院で出産予定なのですが、毎回日本人の通訳の方が付いて診察をしてくれます。さらにインターネット環境の発達のお陰で、skypeやLINEで気軽に日本の方と連絡をとる事ができ、またYouTubeで日本のTVも見られるため、一瞬岡山から遠く離れた日本のどこかにいるくらいの感覚になります。

研究面についてですが、近年アメリカの研究予算はかなり削減されており、ラボ運営が大変そうです。研究予算が当たらない場合、ラボが閉鎖されることがよくあります。

その点、日本はかなり恵まれていると思います。かつて欧米に留学する目的と言えば、日本には無い最先端技術を得る点にあったと思いますが、最近では日本の技術は相当に進んでおり、勝るとも劣りません。ラボの人数や規模なら負けるかもしれませんが、技術なら負けることは無いと思います。当初、わざわざ留学する意味はあるのかと思うときもありました。というのも日々の研究手技は日本にいる時と対して変わりません。つまり海外でしか出来ない研究手技はほぼ無いと思います。しかしアメリカでの経験は、私にとって価値あるものだと思っています。留学でしか得られないものはハード面ではなくソフト面だと思っています。つまり世界における価値観の相違、様々な国の研究に対する姿勢、世界を相手にした時の対処法や戦略。こういう言葉や機械では代替出来ない技能こそ、近年の留学の意味があるのではと思います。留学では随分多くの事を学びそしてその中には留学固有のものもあるし、そうでないものもあります。この経験を生かすかどうかは、自分次第だと思います。またこういう時代だからこそ、チャンスがあれば多くの人にこの体験をして欲しいと思います。海外で生活することにより、今まで見えなかった日本の良いところや悪いところがよく見えてきます。日本にいるときは考えられなかったのですが、ラボはアメリカ人がほとんどなので、木曜の夕方くらいからみんな週末モードになりソワソワし始めます。そして金曜の昼食後にはラボの人口密度が減りはじめ、夕方過ぎまでラボにいるのは、私一人になります。そして月曜の午前中は遊び疲れでコーヒブレイクが多いです。このスタイルが良いかどうかはさておき、彼らの生活スタイルを見ているうちに「日々の生活をエンジョイする」ことを心掛るようになりました。私事ですがもうじき、第一子が産まれます。アメリカにいる間くらいは、良いダディーでいようかなと思っています。そして留学という貴重な機会を与えていただきましたので、帰国後にここで得た事が生かされるよう悔いが残らないように、頑張ろうと思います。



「ハワイ大学医学部シミュレーショントレーニング研修に参加して」

歯科麻酔科
樋口 仁

この度、縁あってハワイ大学医学部SimTikiシミュレーションセンターで行われた、シミュレーショントレーニングプログラムに参加する機会を得ることができました。これは岡山大学医療教育総合開発センターが主催をした、シミュレーション教育のインストラクターを養成するためのコースです。今回は、なんと本場のハワイ大学で研修を受けることができるということで、早々に申し込みをすると、運良く参加者に選んでいただけました。



シミュレーション教育はまだ日本ではなじみがないかもしれませんが、いわゆるシミュレーター（マネキンなど）を使って手技を習得したり、あるいはシナリオを通じて急変時などの患者への対応を学ぶというものです。歯科における模型を使ったファントム実習もこのシミュレーション教育の一つですし、ICLSやACLS・BLSなどの救急蘇生のコースはまさにこのシミュレーション教育を代表するものです。現在、アメリカの医学教育においては、このシミュレーション教育が非常に盛んで、シミュレーション教育を行うためのシミュレーションセンターが、全米すべての医学部に併設されているそうです。なかでもピッツバーク大学やハワイ大学のシミュレーションセンターは設備および教育内容ともに大変充実していて有名です。

今回の研修内容はシミュレーション教育の位置づけやその必要性、シミュレーション教育のためのシナリオ作製やディブリーフィング（学習者への振り返り）の方法まで幅広いもので、まず講義を受け、それをお互いに実践してみるというものでした。このシミュレーション教育というのはただ単にシミュレーターを使うというのではなく、その教育手法も従来の教育手法とまったく異なっています。指導者は学習者に知識や技術を

一方的に教えるのではなく、いわゆるコーチとして、上手く学習できるように助言を加え誘導していき、最終的には学習者自身でその学習目標に到達させるというものです。学習者が自身で”ひらめき”を持てることがたいへん重要ということでした。当然、個々の学習者のレベルに応じてその指導目標やディブリーフィングの方法を変える必要があります。指導する側としては大変な時間と労力が必要となりますが、その学習効果は大変高いことが、科学的にも証明されています。このあたり、医学教育法についても、それを系統立てて学問を作ってしまうところ、またそれを科学的に評価するところなど、さすがアメリカだなあと感心しました。

今回は歯科医師の参加は僕だけでしたが、その他医師、研修医、看護師、薬剤師など様々な分野から20名の参加者が集まり、3日間のシミュレーション研修を受けました。一緒に食事をしたり、観光をしたり（ほんのちょっとだけです）と職種を超えた交流ができ、とても楽しい時を過ごしました。研修の講義の内容にもありましたが、現在の医療過誤の原因の多くがコミュニケーションの不足、特に職種間のコミュニケーションの不足が原因だそうです。これを少しでも減らすために職種を超えたシミュレーション教育が必要だと。今回の研修はそれぞれの分野と連携していく良いきっかけにもなったように思います。シミュレーション教育に関し、歯科は若干遅れを取っている感がありますが、今後、歯科医学教育にもこのシミュレーション教育を組み込



むべく努力をしようと思います。

現在、岡山大学医療教育総合開発センターではこのハワイ大学の教育方法を取り入れた様々なシミュレーショントレーニングを行っています。興味がある方は是非参加してみてください。きっとこれまでにない医学教育を体験できると思います。

現在、岡山大学医療教育総合開発センターではこのハワイ大学の教育方法を取り入れた様々なシミュレーショントレーニングを行っています。興味がある方は是非参加してみてください。きっとこれまでにない医学教育を体験できると思います。



「冈山大学O-NECUS项目留学生」

歯科薬理学分野
儀 丹

大家好！我是冈山大学齿科药理学研究室的学生仪丹。我于**2011年6月**毕业于河南大学药学院药学专业，同时辅修该校工商管理学院人力资源管理专业，获得理学与管理学双学士学位，并于当年**9月**考入哈尔滨医科大学药物化学专业攻读硕士学位。**2012年3月**我参加了**O-NECUS**交流项目，该项目是冈山大学—中国东北部大学研究生院留学生交流计划的英文缩写,即**Okayama University--North East China Universities Platform, ‘Graduate’ Student Exchange Program**，是日本冈山大学与中国东北五所大学——吉林大学、东北师范大学、中国医科大学、大连医科大学和哈尔滨医科大学联合实施的短期留学研修为目的的研究生交流培养项目。我很幸运地通过了面试并于当年**10月份**来到了冈山大学，我将作为交换生在这里学习生活一年。

这是我第一次来到国外，我刚到的时候会有些担心如何与大家交流。北山老师总是鼓励我，给我信心，我非常怀念他。十川纪夫老师和十川千春老师在实验和生活上都给了我很大的帮助，我永远会记得。研究室的老师和同学还给我举行了欢迎会，我吃到了正宗的日本寿司，非常好吃！从那时起我对日本料理充满了兴趣。我还很喜欢看日本的动画片，动漫里的主人公哆啦A梦，一休，美少女战士，阿童木，大空翼等等一起伴随我成长。足球小子的大空翼让我对日本足球有了认识。我很喜欢看足球比赛，记得**2002年**韩日世界杯，两位东道主都有很好的表现，这是亚



洲足球的骄傲，当时我就期待着有一天能去日本看比赛。今年四月底中国北京国安俱乐部和日本广岛三箭俱乐部将在广岛进行一场亚洲冠军杯小组赛，很期待这场比赛。

今年三月份，十川老师带我们去福冈参加了第86届日本药理学学会年会，我见到了很多药理学界知名大学的老师和同学，了解了他们研究的内容。这次学会不仅开拓了我的视野，学术交流的氛围也深深感染了我。我认识到我还有很多需要学习，不仅需要提高实验技术和知识，也要学习大师们认真严谨的研究作风。

非常感谢冈山大学帮助和关心我的每一位老师和同学！我相信这一年我会收获很多，我会很珍惜这一年时间的学习和生活。

「Okayama University O-NECUS Program Student」

**Dental Pharmacology
Yi Dan**

Hello! I am Yi Dan from Department of Dental Pharmacology, Okayama University. It is my honour to introduce myself. I graduated from Henan University in June 2011 with double bachelor's degrees both in science and management. My major subject was pharmacy and minor was human resources management. In September of the same year, I went to Harbin Medical University and took a major in natural pharmaceutical chemistry to pursue a master's degree. In March 2012, I took part in O-NECUS (Okayama University—North East China Universities Platform, 'Graduate' Student Exchange Program) Program, which is a graduate student exchange program between Okayama University and five universities (Jilin University, Northeast Normal University, China Medical University, Dalian Medical University and Harbin Medical University) in northeast of China. I passed the interview luckily and came to Okayama University in October. I would be studying and living here for one year as an exchange student.

It is my first time to go abroad. When I just arrived, I was a little worried about how to communicate with other people. Prof. Kitayama always encouraged me and gave me confidence. I missed him so much. Mr. and Mrs. Sogawa help me a lot both in experiment and life. I am really grateful and I will always remember. The department also hold a welcome party for me. I tasted Japanese sushi in the party. How delicious! Since then I have been interested in Japanese food. I also fond of watching Japanese cartoons. I grow up with the cartoon characters Doraemon, Ikkyu, Sailor Moon, Astro Boy, Ozora Tsubasa and so on. I know about Japanese football from Tsubasa and then I started to like watching football match. I remember in 2002

Japan and Korea World Cup, two hosts achieved great success. It was a pride of Asian football. At that time I hoped one day I could go to Japan to watch a match. In late April of this year, Beijing Guoan Football Club and Sanfrece Hiroshima will have a competition in the group game of Asian Championships. I am looking forward to this match.

In March, Dr. Sogawa took us to Fukuoka to take part in the 86th Japan Pharmacology Society annual meeting. I have seen teachers and students from many famous universities in this field and known about their research. This experience broadened my horizon, and the academic atmosphere deeply inspired me. I know I have a lot to learn, not only experimental technologies and knowledge but also the earnest and rigorous study style.

I believe I can harvest a lot this year. I will cherish the time being here. Thanks to all the teachers and students that wish the best for me, I really appreciate it and you will be in my heart forever.

「留学生レポート」

生体材料学分野
Gulsan ara sathi

バングラデシュ出身のアラです。私は2004年10月に口腔病理学分野永井先生の協力により、日本へ研究に来ることになりました。岡山大学大学院医歯薬学総合研究科口腔病理学分野を卒業後、2年間日本学術振興会外国人特別研究員として同分野にて勤務させていただきました。その後、生体材料学分野松本卓也先生の下、2012年7月から3月まで技術補佐員として勤務致しました。そしてこの度、2013年4月1日付けで生体材料学分野の助教に着任致します。

日本へ来たことで研究以外にも大変良い経験をすることができました。

日本とバングラデシュには様々な相違点が見られます。

私の国には桜と紅葉はありません。また、最も異なるのが冬で、バングラデシュにはわずか2カ月しか冬は無く、さほど厳しくありません。

また、教育システムも異なります。例えば、バングラデシュでは小学校5年間、中学校5年間、高校は2年間です。

歯科教育システムも異なり、私の国の歯科過程では、4年間の学部教育と1年のインターンシップがあります。

来日して、初めは不安でいっぱいでしたが、日本人の優しさ、日本語、日本の文化に触れ、今ではまるで恋に落ちたかのように日本に魅了されています。私にとって日本は第二のホームグラウンドとなっています。この様に感じさせてくれた岡山にお礼を言いたいと思います。



「人生のいい思い出」

口腔病理学分野
李海テイ

2012年4月修士課程入学したの李海テイと申します。口腔病理学分野の長塚教授の御陰で、口腔病理に入りました。

ご挨拶を兼ねまして自己紹介をさせていただきます。私は2008年7月中国で石家庄市の医学校で口腔医学を卒業しました。同年の10月日本にきました。1年半の日本語を勉強した後、山陽学園大学3年編入しました。2年間の間に日本語とともに心理学を学びました。特に研究法及び日本文章の書き方もできました。



2012年4月岡山大学の医歯薬学総合研究科の修士課程に進学しました。今、長塚教授と辻極准教授のご指導で研究を行いました。多くの先生と出会いしました。たくさんの知識を勉強できました。

長い時間かかりました、いろいろな困難も会いましたが、やっと、自分の目標を現実になりました。とてもうれしかったです。最初、知識の不足で困ることが多いですが、教授、准教授、助教授、別分野の先生から多くのこと教えてくれました。本当に心から感謝しています。

修士課程1年前半の講義が多いあまり実験していませんでした。後半から講義が少なくなりました。実験そこから始まりました。

今、私は細胞の培養や実験の手伝いなどしています。放射線分野の村上先生の実験を手伝っています。癌の免疫療法の実験しています。マウスの体に癌細胞をいれて時間を経て腫瘍が大きになったら、腫瘍のサイズを測り、体重も測り、サイズの大きさより、マウスの腫瘍を摘出して、注射条件でマウスを分けります。また、注射条件により、マウスの生存率を統計し、もし、ワクチン接種したマウスの生存率が高いと、このワクチ

ンを用いてがん治療を役に立つかもしれませんが。この実験は毎日忙しいですが、とても楽しいです。もちろん、先生、厳しい時がありますが、非常に優しい方です。先生からおおくの知識をもらいました。ありがとうございます。

また、1年卒業になりますが、私の人生として、岡山大学での勉強ことは一番いい思い出とおもいます。留学後は中国に戻り、歯科医師として地域医療に貢献したいと考えています。

「美好的回忆」

口腔病理学
李海婷

我是2012年4月硕士课程入学的李海婷。托口腔病理学研究室长塚教授的福，我进入了口腔病理学研究室。

问候并介绍一下我自己我2008年7月毕业于中国河北省石家庄市的医学校专攻口腔医学。同年的10月我来到了日本。经过1年半的日语学习后我编入考上了山阳学园大学学习心理学。经过2年后，我学会研究方法和日语文章的写作方法。

2012年4月我考入了冈山大学的医齿药学综合研究课的硕士课程。现在在长塚教授和辻塚准教授的指导下进行研究。并且遇到了很多老师，学习到了很多知识。

花费了很长时间的也遇到了很多困难，但是终于自己的目标得以实现。非常的高兴。最初的时候，由于知识不足遇到了很多困难的事。在教授，准教授，助教还有其他研究室的老师的帮助下都解决了。真的很感谢他们对我的帮助。

硕士课程第一年的前半学期讲义很多没能做实验。后半学期，讲义很少，从那开始做的实验。

现在，我做细胞培养和帮忙老师的实验，帮助放射科研究室的木村老师做实验。实验抗癌的免疫疗法。先，把癌细胞注射到老鼠体内，经过一段时间后肿瘤出来后，测量肿瘤的大小，和老鼠的体重。然后，根据肿瘤的大小来摘取肿瘤，按条件注射药物将老鼠进行分类。然后，统计老鼠的生存时间，如果注入疫苗的老鼠生存时间长，这种疫苗的抗癌就有效果，就有可能用于提高癌症患者的生存时间。做这个实验每天都很忙，但是很快乐。当然，老师有时候会很严格，但是它是一个很温和的人。而且从他那里学会了很多知识。很感谢他。

还有一年我就要毕业了，在冈山大学的学习时光将会是我一生当中最美好的回忆。留学后我想回到中国为地方医疗做出自己的贡献。



「岡山歯学会奨励論文賞を受賞して」

口腔外科（病態系）
栗尾 奈愛

この度は岡山歯学会奨励論文賞に選出いただき、選考委員ならびに岡山歯学会学会員の皆様方に大変感謝申し上げます。今回、以下の論文が受賞対象となりました。"Naito Kurio et al : Anti-tumor effect in human breast cancer by TAE226, a dual inhibitor for FAK and IGF-1R in vitro and in vivo. *Exp Cell Res.* 2011 May 1;317(8):1134-46."

骨を転移標的臓器とする悪性腫瘍は乳癌、前立腺癌、肺癌、甲状腺癌、腎癌、悪性黒色腫、口腔癌などが知られています。骨転移が直接生命を脅かすことは少ないのですが、著しい骨痛、病的骨折、高カルシウム血症などを合併し患者の QOL を著しく低下させます。また骨に転移した癌に対しては既存の抗癌剤療法が奏功しにくく、骨微小環境下での癌細胞の増殖を制御する分子メカニズムを明らかにすることが癌骨転移治療の新たな治療法の開発に不可欠となっています。そこで悪性腫瘍、特に浸潤、転移能の高い細胞に高発現している FAK(focal adhesion kinase)に着目しました。本研究では FAK を高発現している高転移性乳癌細胞株 MDA-MB-231 細胞をヌードマウスの心腔内に投与して作製した癌骨転移モデルに対して、FAK の分子標的阻害薬である TAE226 を経口投与することによる治療効果に関する検討をおこない、FAK 阻害が癌骨転移巣における骨髄内での腫瘍増殖を抑制し、さらに破骨細胞性骨吸収を抑制することをあきらかとしました。この破骨細胞性骨吸収の抑制機構として一つは FAK 阻害による抗腫瘍効果により腫瘍細胞自身が産生する PTHrP 等の破骨細胞分化誘導因子を抑制すること、もう一つは破骨細胞前駆細胞の増殖、接着、遊走を抑制し、また RANKL 下流の破骨細胞分化シグナルの発現を阻害することにより破骨細胞分化を直接的に抑制する可能性を見いだしました。

現在私は、これらの研究結果をふまえ骨組織特異的に FAK 遺伝子をノックアウトしたマウスを作製し、in vivo ならびに vitro での機能解析をおこなっているところであり、今回の受賞を励みとしてなお一層の努力をしていきたいと思えます。

最後になりましたが、ご指導いただきました佐々木朗教授、志茂剛助教をはじめ、ご協力をいただきました多くの共同研究者の先生方に深謝致します。

「岡山歯学会奨励論文賞を受賞して」

口腔外科（病態系）
山本 大介

この度は名誉ある岡山歯学会奨励論文賞に選出していただき、岡山歯学会の先生方には大変感謝申し上げます。また、ご推薦いただきました目瀬浩准教授に御礼申し上げます。受賞論文は“Yamamoto D, *et al.* Nicotine Overrides DNA Damage-Induced G1/S Restriction in Lung Cells. PLoS ONE 6(4): e18619, 2011.”です。

本論文では、たばこの主成分であるニコチンのもつ発がん作用や治療抵抗性・がん再発に関わる生物学的役割についての研究を行いました。細胞がベンゾピレンやガンマ線により遺伝子障害を受けた際に、ニコチンが細胞周期（G1期）に作用し発がんに関与する可能性を持つことを報告しました。



共著の西岡先生と

ボストンハーバーにて

大学院在籍中の2009年2月から2年間ハーバード大学医学部ベスイスラエルメディカルセンター放射線腫瘍学に留学する機会をいただきました。Chang-Yan Chen教授、辻孝憲先生の指導のもと米国ボストンで研究に没頭した日々を昨日のこのように懐かしく思います。世界中から集まる研究者仲間たちと切磋琢磨しながら研究をし、精一杯生活を楽しむことも忘れない充実した日々を過ごせたことは貴重な経験でした。今までもこれからも当時のハングリーな気持ちを持ち続けていきたいと感じます。

2013年4月から、福山市民病院に歯科口腔外科の開設から携わる幸運に恵まれ、目瀬先生と共に広島県福山市に赴任しました。私にとって福山市は広島大学附属福山中学・高校と6年間岡山から通った第2の故郷とも言える町です。地域医療に全力投球できる素晴らしい環境に喜びを感じながら、岡山大学を通して学んだことを基礎に今後も歯学の発展に向けて研究・発表を継続していきます。

最後になりましたが、様々な機会を与えていただきました佐々木朗教授、ならびにご指導、ご協力いただいた多くの共同研究者の方々にこの場をお借りして感謝いたします。

「動物モデルからイノベーション」

予防歯科
江國 大輔

この度、以下の論文で岡山歯学会から優秀論文賞を頂くことになり、大変光栄に感じております。

D. Ekuni, T. Tomofuji, K. Irie, T. Azuma, Y. Endo, K. Kasuyama, M. Morita.
Occlusal Disharmony Increases Amyloid- β in the Rat Hippocampus. *Neuromol Med* (2011) 13:197-203.

内容：アミロイド β は、アルツハイマー病において重要な役割を果たす。アミロイド β は、ストレスによって増加する。一方で、咬合異常は、ストレスを引き起こす。そこで、本研究では、咬合異常によって誘導されたストレスがラット海馬の β アミロイドの蓄積に与える影響の有無について調べることを目的とした。

8週齢Wistar系雄性ラットを18匹用いて3群（各6匹）に分けた。咬合異常群では、ベースライン時に上顎臼歯の咬頭を削合して8週間飼育した。咬合回復群では、ベースライン時に上顎左右臼歯の咬頭を削合して4週間飼育後、レジンで咬頭を復元してさらに4週間飼育した。対照群では無処置で通常飼育した。

血液中のコルチコステロン濃度は、咬合異常群で4週目および8週目で対照群より有意に高くなり、ストレスがかかっていることが確認された。咬合異常群の海馬には、対照群に比べて β アミロイド40および42の蓄積が有意に多かった。また、グルココルチコイドレセプターと断片化カスパーゼ3の増加も有意に認められた。咬合回復群では、8週後にこれらの値が有意に減少していた。

以上より、咬合異常によって誘導されたストレスが、グルココルチコイドシグナルを介して、ラット海馬の β アミロイド量を増加させることがわかった。

本研究で、咬合の回復がアルツハイマー病の増悪を抑制できる可能性を示唆していることから、超高齢社会を迎えたこの日本において、口腔の健康維持・歯科治療の重要性を世間に強く訴える研究と考えられます。本論文の成果は、マスコミでも取り上げられ、新聞・テレビ・雑誌で話題になりました。しかしながら、あくまで基礎研究（動物モデル）の成果であって、ヒトへの臨床応用にはまだ道のりがあります。複数のメディアで取り上げていただいた背景には、もしかするとこれからの発展性が期待されているからかもしれません。

今回のテーマは新しい分野の開拓でした。今まで地道に行ってきた歯周病に関する動物モデルの研究を応用する形でした。自身にとってのひとつのイノベーション

(innovation) となったかもしれません。大学内でも、この「イノベーション」という言葉が飛び交っています。国立大学の見直し、道州制の導入、歯学部統廃合・・・など逆風の中での「イノベーション」が、我々の岡山大学に求められている現状です。岡山大学歯学部って、こんなに素晴らしい、こんなところが世界一、こんな研究をするならここしかないなどという“Only one”の存在価値を世間に認めてもらう必要があります。

す。大学を取り巻く「Innovation」は、まさに生き残りに直結しているようです。本賞は、もともと研究指導をする中堅研究者を対象とするということですから、岡山大学歯学部が生き残れるように、後継者に研究指導をして、優秀な人材育成に貢献しなければいけないと感じております。そして、岡山大学出身の人材が世界で活躍できるように今後もベストを尽くしたいと思えます。

最後に、受賞にあたり、日々お世話になっている関係者の皆様には、この場をお借りして心よりお礼申し上げます。ご指導頂きました森田学教授をはじめ、多くの先生方に深謝致します。

かみ合わせ悪いと増殖

岡山大学院医歯薬学総合研究科の森田学教授（予防歯科学）と江国大輔助教（同）らの研究グループは、歯のかみ合わせに異常があると、アルツハイマー病の原因といわれるタンパク質「アミロイドβ」が脳の海馬で増殖することを、ラットによる実験で突き止めた。認知症の一種であるアルツハイマー病の予防や治療につながる成果として注目される。米神経科学誌の9月号に掲載された。（内田主助）

岡山大教授らラット実験 予防や治療へ成果



森田学教授



江国大輔助教

かみ合わせとアミロイドβの関係

かみ合わせ異常群	かみ合わせ異常を治療群	正常群
		
4週間	4週間	4週間
経過観察	かみ合わせを治療	経過観察
↓	↓	↓
3	1	1
海馬に発現したアミロイドβ量 (正常群を1とした場合)		

アルツハイマー病原因タンパク質

ラット18匹を、①奥の歯を削ったかみ合わせ異常②かみ合わせ異常を4週間後に治療③正常の3群に分けて実験。8週間後、脳で記憶をつかさどる海馬に発現したアミロイドβ

ラット18匹を、①奥の歯を削ったかみ合わせ異常②かみ合わせ異常を4週間後に治療③正常の3群に分けて実験。8週間後、脳で記憶をつかさどる海馬に発現したアミロイドβ

森田学教授は「かみ合わせが悪いと、ヒトでも認知症が悪化する可能性が高い。脳神経分野の医師らと連携し、治療や悪化予防に成果を役立てたい」としている。

さらに、かみ合わせが悪いと、脳内のストレスや神経細胞の自滅（アポトーシス）が増えていることも判明した。

研究グループは、かみ合わせ異常が身体にストレスをもたらしたり、記憶障害を引き起こすといった既存の研究成果に着目。アルツハイマー病とかみ合わせとの関係を明らかにする狙いで実験に取り組んだ。

国内におけるアルツハイマー病の推計患者数は約100万人。高齢社会により、今後も患者数が増えることが予測されている。

江国助教は「かみ合わせが悪いと、ヒトでも認知症が悪化する可能性が高い。脳神経分野の医師らと連携し、治療や悪化予防に成果を役立てたい」としている。

2011年9月16日 山陽新聞掲載

「岡山歯学会 優秀論文賞受賞（臨床論文）を受賞して」

徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部 予防歯学分野
玉木 直文



この度、以下の論文で岡山歯学会の優秀論文賞（臨床論文）を受賞する栄誉をいただきました。選考していただいた岡山歯学会関係の先生方には、大変感謝しております。

Tamaki N, Takaki A, Tomofuji T, Endo Y, Kasuyama K, Ekuni D, Yasunaka T, Yamamoto K, Morita M. Stage of hepatocellular carcinoma is associated with periodontitis. J Clin Periodontol. 38(11): 1015-1020, 2011.

活性酸素種が数々の全身疾患の発症に関与すると言われていますが、これまで“歯周病と酸化ストレスとの関連”についての研究を続けてきました。まず、横断的な臨床研究として歯周病患者の酸化ストレスを測定した結果、歯周病が進行することにより、全身性の活性酸素種の産生が増加していました。このことは、歯周病が活性酸素種の過剰産生を介して、全身の臓器に影響を及ぼしている可能性を示唆しています。次に介入研究として、歯周病患者に治療を行うと、歯周病の改善に伴い酸化ストレスやCRP値と酸化LDL濃度が減少することを示しました。これらの結果、歯周病と全身の酸化ストレスとの間に関連性があることが分かりましたが、全身疾患にどのような影響を与えるかについての検討が必要でした。

そこで今回の申請論文において、岡山大学病院消化器内科の先生方の協力のもとで、肝細胞癌患者における歯周病の有無が酸化ストレス、肝癌の進行度や肝機能に与える影響についての研究を行いました。その結果、肝癌の進行度において、歯周病有病者群の方が進行していることが分かりました。また、肝機能の悪化を示す総ビリルビン濃度や酸化ストレス度において、歯周病有病者群の方が高く、肝癌の進行度と酸化ストレス度が有意に関連しておりました。以上のことから、歯周病による酸化ストレスの増加が、肝細胞癌患者における肝機能に有害であることが示唆されました。このことは、歯周病と全身疾患との関連のメカニズムを解明するうえで、酸化ストレスによる影響が大きいことを証明することにつながると考えています。

平成24年度より徳島大学に転任しておりますが、今後も今回の受賞を励みに一層努力をしていきたいと思っております。最後に本受賞におきまして、これまで日々お世話になっておりました岡山大学大学院医歯薬学総合研究科予防歯科学分野の森田学先生や共同研究者の皆様、また本研究にご協力いただいた高木章乃夫先生をはじめとする岡山大学病院消化器内科の関係者の皆様に、この場をお借りして心よりお礼申し上げます。

「臨床実習を通じて」

歯学部歯学科5年 校友会副会長
福原 大樹



2012年(平成24年)10月から始まった臨床実習も約半年が経ちました。臨床実習では、これまで講義や基礎実習で学んできたことをどのように使うのか、実際の患者さんを相手に学ぶことができます。学生という立場でありながら臨床の場で診療に携わることができ、責任感を覚えることとともにやりがいを感じています。当初は、器具がどこにあるかも分からず、先生方だけでなく患者さんにも迷惑をかけることもありました。少しずつ診療に必要な知識や技能を習得しつつありますが、指導してくださる先生方の診療を見るとますますの努力が不可欠であると感じています。

診療を通じて私は患者さんとのコミュニケーションが重要なことであるということ学びました。これまでに講義で何度も言われてきたことでしたが、実際に経験することでその意味をよく理解できます。それはつまり、患者さんとコミュニケーションをとることで初めてその患者さんが何を望んでいるのかを理解することができるということです。また、その希望に沿ってどれだけのことをしてあげられるのかを考える必要があります。EBMという学術的なものと、目の前の患者さん一人一人の個性・要望とのバランスのとり方を考えながら、日々学ばせていただいています。これからも医療者の一員として患者さんに真摯に対応していきたいと思えます。

臨床実習が終わった後は国家試験があり、残り一年を切りました。私たちは臨床実習や国家試験に対する勉強会などを通じて全員で協力しながら合格に向けて一步一步進んでいます。もちろん、今の実習は国家試験に合格するためだけに行われているわけではありません。むしろその後、自分一人で責任をもって診療するために必要なことだと思います。国家試験の合格は私たちの通過点でしかないことを自覚して実習に取り組んでいきたいと思えます。

私たちにはあと半年、臨床実習が残っています。診療の前にはライターの先生とディスカッションをしたり、口頭試問を受けたりします。知識が足りないところ、理解ができないところは授業プリントや文献を何度も見直しました。自分たちの知識を十分に応用することができるのか悩み、臨床の難しさを日々痛感しています。しかし、それは臨床実習生である今でしか行えないことであり、貴重な経験をさせていただいていると思えます。未だに至らないところの多い私たちですが、それでも熱心にご指導していただいている多くの先生方に、この場を借りまして厚く御礼申し上げます。

「岡山大学病院卒後臨床研修センター」

卒後臨床研修医
浦瀬 綾香

私は卒業後一年間、岡山大学病院卒後臨床研修センター(歯科)にて研修を行いました。同センターにおける研修には大きく分けて、大学病院のみで研修を行う単独型プログラム、大学病院と外部協力型研修施設で研修を行う複合型プログラムがあります。私は単独型プログラムを選択し、研修を行いました。

この単独型プログラムは、一年間、主に、総合歯科で臨床研修を行いながら、各診療科で専門性の高い診療を学ぶプログラムでした。総合歯科では、自身で予約管理と診療を行います。診療は、初めて自身で行う処置も多く、事前に診療内容の予習を行い、指導医とディスカッションを行いました。ディスカッションの中で、指導医からの確かなアドバイスを頂いたり、さらに論文検索を行うことで、疑問点を解決しました。この診療前の準備は、より深い知識を学ぶことができ、とても有意義なものでした。診療後には、研修プログラムソフトRESIDENTを記載します。このRESIDENTでは、各診療内容を記載し、疑問に思ったことや、考えたこと、感想、反省点等を挙げ、指導医に提出します。それに対し、指導医からフィードバックを頂けるため、次の診療に活かすことができました。もちろん、直接相談に行くこともありましたが、文章にすることで自分の考えをまとめ、後日、自分の診療を見直すことが出来ました。また、各診療科での研修においても、専門性の高い診療を実際に見て学ぶことができ、その後、指導医からフィードバックを頂きました。診療以外でも、各診療科の主催する実習や症例検討会、講習会等に参加させて頂くことができ、とても充実した研修を行うことができました。

さらに、患者の問診、診査から、問題点を抽出し、病態を考え、それを踏まえて治療方針、治療計画を立案し、一口腔一単位で考える治療の重要性をこの一年をかけて学びました。また、患者とコミュニケーションを行う上で、患者とのラポールを形成するためにはどうすべきか、治療内容をどのように説明すれば理解してもらえるか等、考えること、学ぶことが多くありました。

岡山大学病院卒後臨床研修センターで研修を行い、歯科医師としての第一歩を踏み出しました。治療に対する考え方、疑問点に対する向き合い方、患者との接し方等、多くのことを学ぶことができました。また、私は岡山大学出身ですが、他大学出身者も交えて、私を含めて56名の研修医とともに研鑽を積むことで、今後、いつでも相談できる一生涯の仲間を得ることもできました。岡山大学病院卒後臨床研修センターでの経験を活かし、良質な医療を提供することで、社会貢献できる歯科医師を目指したいと思いません。

「ベストプラクティス賞最優秀賞を受賞して」

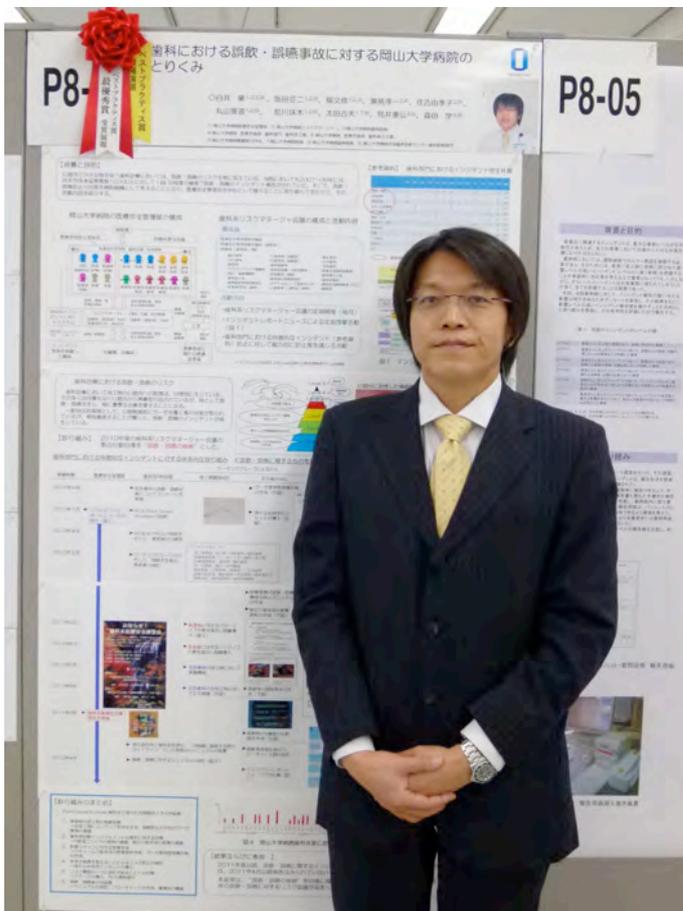
岡山大学病院 医療安全管理部 総合歯科
白井 肇

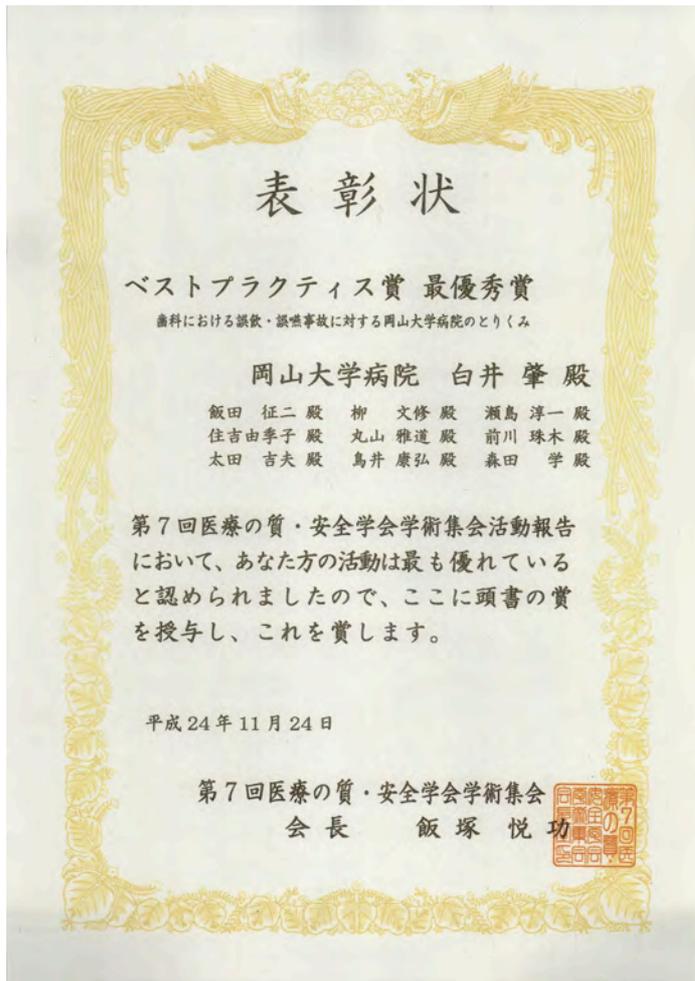
近年の社会情勢の変化に伴い、国民の医療の安全性に対する関心は高まってきており、歯科医療もその例外ではない。歯科医療においては、医科と共通する項目である患者間違い、針刺し事故ならびに救急初動等に加えて、誤飲・誤嚥、気腫ならびに粘膜損傷等の歯科診療特有の課題を抱えている。これらのインシデントを職場で隠蔽することなくお互いが情報を共有し、一方的に個人の資質に対して因果を決めつけることなく、原因検索とその防止策について検討を行い、歯科医療の安全管理をいかに図るかは、いかなる医療機関においても避けて通ることのできない重要な課題である。

当病院においても、月に一度開催している病院全体のリスクマネージャー会議後に、歯科医療に携わる各分野のリスクマネージャーに加えて、岡山大学病院医療安全管理部の方々とともに、**歯科系リスクマネージャー会議**として歯科特有の問題に対して取り組んできた。

その会議の活動内容の一部について、平成24年11月23.24日に大宮ソニックシティを会場に開催された第7回医療の質・安全学会学術大会に参加し、岡山大学病院医療安全管理部と歯科系リスクマネージャー会議を代表して“歯科における誤飲・誤嚥事故に対する岡山大学病院のとりくみ”という演題でポスター発表してきた。

“誤飲・誤嚥の根絶”を目標とした歯科の体系的な活動についての発表は、各病院関係者の医療安全に関わる方々からの関心が高い様子であった。病院の中で、歯科は大きなインシデントが発生しているにもかかわらず、問題を軽視しすぎていることや事故があっても報告しないなど歯科全体が隠蔽体質にあることなどに対して学会参加者から叱責を受ける中で、特に関心が高かったのは、歯科の問題を病院全体の問題として取り組んでいる活動の様子であった。いかに歯科医師を医療安全活動に参加させるかというこの1点に学会参加者の関心が集中していたのが、私にとっては予想外の事で非常に印象に残った。





「手術中に誤飲させたという
のは医科にとっては到底放置で
きない大問題である。」と発言さ
れた先生の考えは十分に理解で
きる一方で、「誤飲くらい病院全
体には報告しなくても良いだろ
う」という歯科医師としての考
えも良く理解できる。学会に参
加して歯科特有のインシデント
が発生した場合に、歯科医師は
病院全体の一員としてどう対処
すべきであるかということを深
く考えさせられた。

幸運なことに、エントリーさ
れた144の発表演題の中から有
効性、適用可能性、独創性の観
点から高く評価され、“ベスト
プラクティス賞最優秀賞”を
受賞させて頂いた。医療安全管
理部を兼務して5年。病院内で
の管理活動は周囲から評価され
る機会の少ない中で、病院内の
一グループとしての活動が病院
外の外部団体に高く評価された
ことは、病院の一員として嬉し
い限りである。

「周術期における口腔機能管理を具体的に考えるシンポジウム」開催

岡山大学病院 クラウンブリッジ補綴科
水口 真実, 縄稚久 美子

昨夏は例年になく猛暑でした。そんな中、平成24年7月22日、岡山大学病院と岡山大学歯学部の主催で、「周術期における口腔機能管理を具体的に考えるシンポジウム」を開催しました。

岡山大学病院では、周術期管理センターと歯科部門を同時に設立し、全国にさきがけて、周術期における積極的な医科・歯科連携をはかっています。その取り組みが評価され、平成24年度診療報酬改訂の周術期口腔管理料の新設につながった経緯があり、北海道から鹿児島まで全国各地から300名以上の聴衆が集まりました。

榎野博史病院長の開会挨拶、森田 学副病院長による主旨説明で幕を開けたシンポジウムは、窪木拓男歯学部長の進行のもと以下のプログラムで行われました。

■岡山大学病院の周術期管理センター開設の経緯とこれまでの取り組み

岡山大学病院 周術期管理センター看護師 足羽孝子先生

■呼吸器外科手術周術期管理法と周術期口腔機能管理の意義

岡山大学病院 呼吸器外科 宗 淳一先生

■岡山大学病院の周術期口腔機能管理の具体的な内容

岡山大学病院 医療支援歯科治療部 副部長 曾我賢彦先生

■周術期口腔機能管理における制度設計

兵庫医科大学病院 歯科口腔外科 岸本裕充先生

■ベッドサイド摂食・嚥下機能検査および訓練

岡山大学病院 スペシャルニーズ歯科センター 村田尚道先生

周術期センター師長の足羽先生、呼吸器外科医の立場からの宗先生の示唆に富んだご講演では、医療の中で本当に役に立つ歯科医療とは何かを強く考えさせられました。医療支援歯科治療部の曾我先生には、医・歯学部併設の我々岡大モデルの総括をしていただきました。また、兵庫医科大学病院の岸本先生には、周術期口腔機能管理の実際を非常にわかりやすくお話いただきました。周術期においても非常に重要である摂食・嚥下評価について、スペシャルニーズ歯科の村田先生からもお話をいただきました。最後は、宮脇卓也副病院長の挨拶で閉会となりました。

満席となった医学部臨床第一講義室では、外界の暑さも時間も忘れて白熱した議論が続きました。岡山発信のこのシンポジウム、今後の歯科界のすばらしい未来を感じさせる非常によい機会になったと思います。

演者の先生方、準備をお手伝いしてくださった先生方には、この場をお借りしまして心より御礼申し上げます。



「岡山大学歯学部同窓会卒後研修会2012」

インプラント再生補綴学分野
園山 亘

平成24年10月14日、同窓会卒後研修会が窪木拓男教授の指導のもとで開催されました。本研修会は、「口腔インプラント治療の基本術式とリスクマネジメント –治療・埋入プランニング, 即時修復/負荷, ティッシュ・マネージメント–」と題し、単に口腔インプラント治療の術式のみを研修するのではなく、欠損補綴治療の1つのオプションとして口腔インプラント治療をどのように考えるのか、実際の埋入プランニングは何を考へて行なっているのか、より審美的な治療結果を導くためにはどのようなティッシュ・マネージメントが必要なのかといった点に焦点を絞り企画いたしました。

午前中には、窪木先生から最新のエビデンスを基にした治療の考え方をご教授頂きました。その後、園山よりプランニングと外科・補綴手技の基本ポイントを提示させて頂きました。次いで木村先生からは多数歯欠損などの難症例治療の実際を、最後に小田先生からはインプラント周囲のティッシュ・マネージメントを豊富な臨床例をもとにまとめて頂きました。

午後の実習では、実際にCT解析実習を行ったうえで、前歯・臼歯の埋入実習を行いました。その間には、小田先生によるティッシュ・マネージメントの実際を、ブタ顎骨を用いてデモンストレーションして頂きました。

当分野で口腔インプラントに関する卒後研修会は5年ぶりとなります。基本的な部分は押さえながらも、当時とは変わった部分を前面に出したいという私の希望があったため、内容が多岐にわたり少々駆け足となったことを反省しておりますが、参加された先生方にひとつでも良いから明日以降に役立つことをお持ち帰りいただければとの思いで準備しました。そうであったことを願っております。

最後になりましたが、開催にあたりご協力いただきました同窓会、ノーベルバイオケア社、技工室、医局の先生方に感謝いたします。



–当日のスケジュール–

日時： 平成24年10月14日（日） 9：30～16：30
 場所： 岡山大学歯学部棟4階第一講義室，5階第1基礎実習室
 内容： 午前（講義）；インプラント治療の基礎から最新トピックスまで
 午後（実習）；インプラント埋入と補綴の計画・術式

タイムスケジュール：

09:00 受付開始
 09:30 同窓会長挨拶
 09:35 講義1 口腔インプラント治療の最新パラダイム
 窪木拓男（インプラント再生補綴学分野教授）
 10:05 講義2 補綴・埋入プランニングとその基本術式
 園山 亘（インプラント再生補綴学分野助教）
 10:20 講義3 解剖学的・補綴学的難症例，多数歯欠損即時修復の実際
 木村 彩（インプラント再生補綴学分野助教）
 10:45 休憩
 10:55 講義4 Implant Plastic Surgery, Implant Esthetic
 小田師巳（クラウンブリッジ補綴科研修登録医，おだデンタルクリニック理事長）
 12:00 休憩（昼食）
 13:00 実習1 補綴プランニングと埋入プランニング実習
 13:40 実習2 臼歯部複数歯欠損埋入実習
 14:10 ライブデモ1 多数歯欠損即時荷重補綴・技工手技
 14:40 休憩
 14:50 ライブデモ2 ティッシュ・マネージメントのための軟組織処置
 15:30 実習3 前歯部単独欠損埋入実習
 16:10 総評，総括質疑，サーティフィケート授与

講 師：窪木拓男，園山 亘，小田師巳，木村 彩
 実習指導：窪木拓男，前川賢治，水口 一，園山 亘，
 小田師巳，木村 彩，上田明広
 実習補助：大野充昭，笈田育尚，上田沙織，新川重彦，中島 隆，
 植田淳二，小山絵理，古味佳子，吉岡裕也



サイエンスカフェ「口腔健康科学と科学芸術への誘い」の開催

生体材料学分野
吉田 靖弘

近年、大学を取り巻く環境は目まぐるしく変化しています。少子高齢化の進行や地域コミュニティの衰退、新興国の台頭による競争激化、といった急激な社会の変化や、東日本大震災という未曾有の国難に直面し、「知の拠点」である大学の役割は日に日に増しています。これに伴い、大学改革はもはや待ったなしの状況であると言われています。既に「大学改革実行プラン」の下、「ミッションの再定義」が始まりました。国立大学が現在果たしている役割とともに、将来ビジョンに立って特色や強みを伸ばし、社会的機能を今後どのように果たしていくかの方向性を明確にすることが求められています。

このような社会情勢に鑑み、歯学部も社会に向かって情報を発信し、どのように社会に貢献するかを常に考えていかねばなりません。当教室でも「歯学の社会への発信」を目指して、(独)科学技術振興機構の支援により、2月1～3日にサイエンスカフェを開催しました。テーマは、「口腔健康科学と科学芸術への誘い」です。ご存じの通り、岡山を含む瀬戸内地方は瀬戸内国際芸術祭などに代表されるように、アートへの取り組みが盛んであり、市民のアートへの意識も高い地域です。アートは現代社会において広く一般市民に浸透しており、サイエンスとは異なり、障壁が低いという利点があります。こういった観点から、岡山大学病院では、現在、アート&ハート ホスピタルというコンセプトのもと、市民と地域医療との距離を縮める試みを進めています。言うまでもなく、歯学部のメインテーマである口腔健康科学(オーラルヘルスサイエンス)は生命の源である食の入口であり、哺乳、発語、食育といった乳幼児期はもちろん、摂食、味覚、嚥下といった一般生活に大きく関与しています。このサイエンスの理解、発展は超高齢化社会におけるQOLの維持、向上の点からも今後、その重要性がさらに高まると予測されます。また、オーラルヘルスサイエンスの特徴は、純粋なライフサイエンスに加え、その治療において材料科学(マテリアルサイエンス)、機械工学(メカニカルエンジニアリング)といった幅広いサイエンスに立脚している点であり、オーラルヘルスサイエンスの理解、発展にはこれらベーシックサイエンスへの興味は不可欠です。今回開催したサイエンスカフェでは、オーラルヘルスサイエンスとアートとを融合した展示により、一般市民のサイエンスに対する障壁を低くし、さらに体験型学習を織り交ぜることでオーラルヘルスサイエンスへの理解と意識を高めることを目指しました。具体的には以下の3点を心掛けました。

(1) サイエンスとアートの融合というコンセプト:

サイエンスへの導入を容易にするために、アートを利用する。具体的なアートとしては、電子顕微鏡像へのカラーリング、自作アニメーションによる分かりやすい説明、組織形態を反映した三次元オブジェ、など様々な展示を想定している。岡山県内のアートギャラリーを使用し、芸術的な空間で行う。これにより展示に対する興味、およびサイエンスに対するブランディング(付加価値)を高める。

(2) ツアー形式での巡回、体験:

解説者をともなった少人数ツアー(7-8名)を行うことで、参加者の効率の良い観賞と、安全の確保、疑問に対する双方向のコミュニケーション、深い理解が可能となる。

(3) 4つの異なるテーマを設定：

①口の構成組織、②口の機能、③口の疾患と治療、④サイエンスアートという4つのセクションを準備。①、②、③についてはそれぞれ、写真、動画、三次元オブジェを準備、これらは直感的に分かりやすい画像、動画の選択、理解を深めるための三次元拡大組織などを準備する。③における治療の解説にあたり、高分子材料成形技術の体験、バーチャルリアリティによる歯牙切削の擬似体験を準備する。④についてはオーラルヘルスサイエンスにインスパイアされたアート作品を展示し、新しい表現方法について示す。

幸い当日は晴天に恵まれ、また、テレビや新聞などメディアでの宣伝も得られたことにより、120名を超える来場者を迎えることができました。また、当初は小学生を対象とを考えていましたが、大人のみでご来場いただく方々も多く、大人から子供まで楽しめるイベントになったのではないかと考えています。

来年度も同様のイベントを企画しています。小さな取組ですが、「歯学の社会発信」の一助となることを願っています。

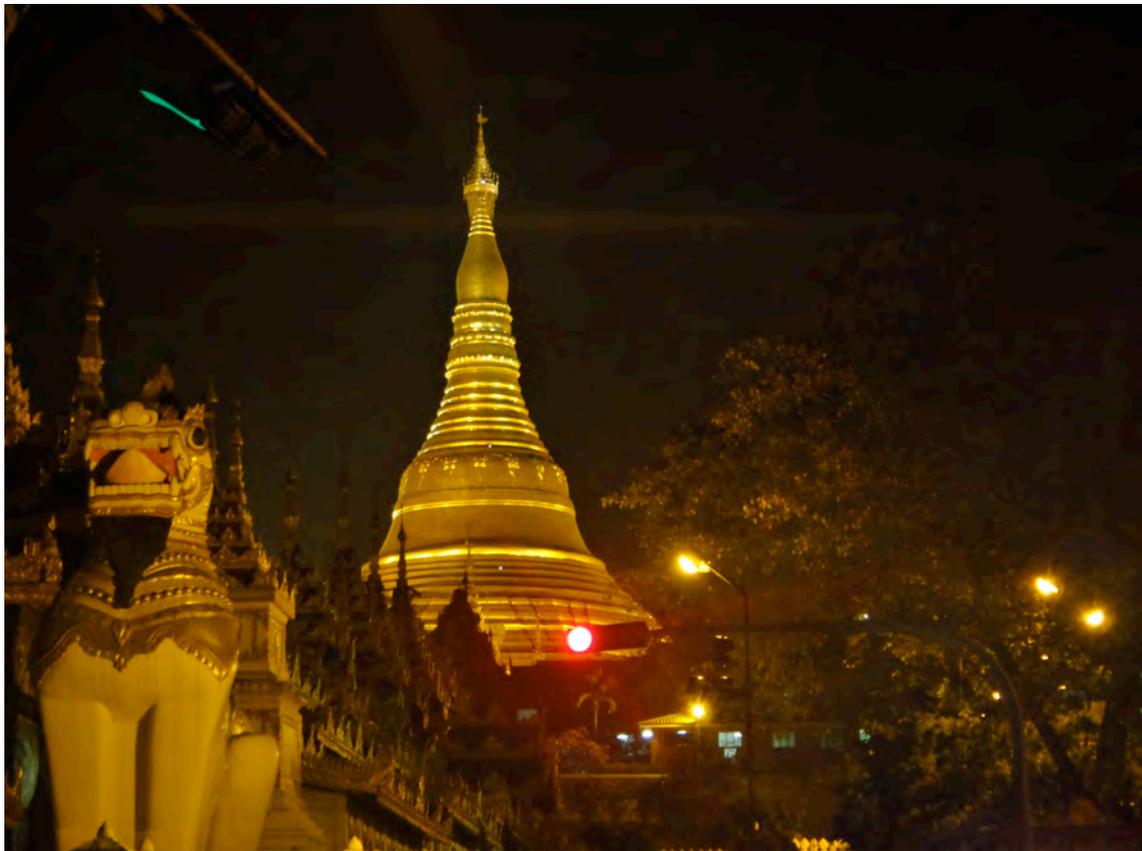


展示会場で歯の微細構造の解説を受ける参加者

「ミャンマーでの海外医療講演」

岡山大学病院 口腔外科再建系
水川 展吉

ミャンマー、かつてのビルマは、2011年のデータで人口は約6,200万人、面積は約68万平方キロメートル（日本の約1.8倍）で、北は中国、東にタイ、西にインドやバングラデシュが位置しています。ミャンマーは現在、経済成長が著しく2012年11月に米国オバマ大統領が訪問、我が国でも2013年1月に麻生外相が訪問し、レアメタルをはじめ豊富な鉱物資源や経済市場、中国外交を含めたアジア外交なども考慮すると目が離せない国となっています。さらに、第二次世界大戦では、ミャンマー建国の父であるアウンサン将軍も一時期、日本とともに英国と戦った経緯があり親日的で、かつ仏教国で治安がよいことも、日本にとっては大きいと思われま



仏塔シュエダゴオン・パヤー

岡山大学は、驚くべきことに、1996年に既に医学部病理学第一講座の岡田茂教授がミャンマーとの医療協力を開始し、C型肝炎の知識普及や輸血事業の改善などで実績をあげられ、2002年12月に岡山大学とミャンマー保健省医学研究局・医科学局との間で、大学間協定が結ばれました。医科学研究局の下に各医科大学（ヤンゴン2校、マンダレー、マグエ）、歯科大学（ヤンゴン、マンダレー）などがあります。2006年には、岡田茂名誉教授が認定NPO法人日本・ミャンマー医療人育成支援協会を立ち上げられ、2009年には、形成外科、木股敬裕教授を中心にミャンマー・日本形成再建外科育成プロジェクトが立ち上げられました。当院形成外科は、2010年からミヤ

ンマーに医師を派遣し、先天異常、腫瘍、外傷、火傷などの治療を行ってきました。2012年11月には、岡山大学とミャンマー保健省医学交流協定締結10周年記念式典がミャンマー最大の都市ヤンゴンで開催され、岡山大学からは、森田潔学長、榎野博史病院長、岡田茂名誉教授ら、ミャンマーからは、ペ・テ・キン保健大臣らが出席、さらなる連携強化を行うことになりました。

以上のように岡山大学とミャンマー保健省は、医学部を中心に非常に密接で友好的な関係を築いてきた歴史があります。

今回、岡田茂名誉教授とともにミャンマーでの医療活動を行ってきた当院形成外科の木股敬裕教授から、口腔外科(再建系)に、ミャンマーでの医療協力のお話をいただき、飯田征二教授と私、水川のミャンマーでの医療講演実現となりました。



ミャンマー歯科協議会から飯田教授へ感謝状贈呈

ミャンマー外遊日程は、2013年1月5日から2013年1月13日であり、われわれの医療講演は、ヤンゴンで1月7日に行われた第41回ミャンマー医学会のシンポジウムでした。このシンポジウムは、日本の救急医療の進歩がテーマであり、座長の一人は、総合内科学の小出典男岡山大学名誉教授が努められました。シンポジストは、山口大学から脳神経外科の鈴木倫保教授、岡山大学からは、救急部の氏家良人教授、脳神経外科の亀田雅博先生、整形外科の田中雅人准教授、および飯田征二教授と私、水川の計6人でした。飯田教授が『顔面外傷や顎変形症の治療』を水川が、『医科歯科連携の顔面外傷や頭頸部がん治療』について、それぞれ英語で講演し、その後、質疑応答となりました。私の講演内容は、2012年4月に開設された大学病院では、日本初、岡山発の岡山大学病院頭頸部がんセンターでの医科歯科連携のがん治療の実際を講演したものであり、この医科歯科連携は、腫瘍のみならず顔面外傷などの救急医療にも応用さ

れ、チーム医療やチーム手術の実例を紹介したものです。その後に質問もあり大いにディスカッションができたと思っています。この学会は、ペ・テ・キン保健大臣が開会の挨拶を述べ、ミャンマー国営テレビが入り、岡田茂名誉教授らは、インタビューを受けていました。その他、岡山大学病院乳腺内分泌外科の土井原博義教授の乳がんのセッションや川崎医科大学脳神経外科の小野成紀教授の講演もあり、多種多彩な内容でした。



ミャンマー医学会での講演

飯田教授と私、水川の講演は、ミャンマー医学会だけでなく、ミャンマーの歯科界からも講演依頼があり、1月11日にミャンマー歯科協議会で飯田教授が『顎変形症の治療』を、水川が『インプラントと骨移植』について講演し、その他、永山久夫プラザホテル社長（元、岡山赤十字病院歯科口腔外科部長）と今回のミャンマー外遊の日本側コーディネーターである形成外科の山田潔先生も講演されました。ミャンマーでは、顎変形症の治療は、ほとんど行われておらず、飯田教授の講演には、現地の歯科口腔外科医も興味津々でした。私のインプラントと骨移植については、ミャンマーでは、やっと始まった程度であり、講演中かなりカメラのフラッシュがたかれ、インプラントに対する関心の高さにも驚かされました。講演後は、感謝状の贈呈と宝石画の記念品も授与され、飯田教授も私も大変うれしく思いました。

講演のない日は、ヤンゴン総合病院およびネピドーの総合病院を訪問し、木股教授や山田先生が率いる形成外科チームの手術見学、（口唇口蓋裂などの先天異常、腫瘍、火傷、外傷など）、ネピドーの総合病院歯科口腔外科の訪問などを行いました。現地の歯科口腔外科医であるキーンモーン先生（ミャンマー側のコーディネーター）は、「ミャンマーは、経済成長は近年著しいが、今なお貧しい国です。一方で交通事故は増加し、顎骨骨折も増加しています。しかし、一般市民の患者は、顎が折れてもプレート固定す

るお金はありません。プレートは高価なので一度使用したプレートのプレート除去後の滅菌再利用でもミャンマーではOKです。なんとか日本の支援を得たい」というお話をうかがいました。また、ミャンマーでは、口腔がんの頻度が高く、口腔がんなどの頭頸部がんの発生率は、肺がんより高いといわれています。その原因のひとつは、噛みタバコです。噛みタバコはミャンマーでは露天商で売っており、値段は5個で100円程度と思われます。この根絶ができれば、口腔がんの発生率は、かなり下がることは間違いありません。しかし、現地医師によると噛みタバコは、ミャンマーでの根強い風俗習慣の1つとなっているため、規制や根絶は難しいとのことでありました。

今後は、口腔外科として具体的に、どのような医療援助ができるのか、例えば、顔面外傷などの骨折の手術や修正手術を現地の口腔外科の歯科医師と共同手術を行うとしても医療器材を日本側で準備しなければならず、麻酔医や看護スタッフもそろえる必要があります。また、資金集めも必要です。一方、噛みタバコの撲滅キャンペーンのような口腔がんの予防活動などは、現地の歯科医師と協力を行いながらやることは、抵抗はあるでしょうが、可能かもしれません。

いずれにせよ飯田教授とどのような援助がベストかを検討したいと思います。

最後に、ミャンマーは、仏塔シュエダゴオン・パヤーやバガンの遺跡群、第二次世界大戦で日本軍の戦没者を慰霊する日本人墓地など文化や歴史を考えさせられるものがたくさんあります。国民は親切で治安も悪くないので、興味のある人は、一度ミャンマーに行かれたらよいと思います。百聞は一見にしかずです。

「ニンビン省総合病院における口唇・口蓋裂治療支援活動に参加して」

顎口腔再建外科学分野
松村 達志

2月28日から3月10日まで、岡山大学病院の中期行動計画に揚げられたく病院歯科において、ベトナムのニンビン省への口唇・口蓋裂治療支援活動を継続して実施するを遂行するため、ベトナム社会主義共和国、ニンビン省へ行って参りました。今回このような機会を与えて頂いたので、その時の模様についてご報告させていただきます。

私が参加したプロジェクトは、ベトナム保健省から医療援助要請を受けた日本口唇口蓋裂協会と日本医学歯学情報機構の共同事業として、口唇口蓋裂患者の無料手術と技術指導を目的に1998年より続いています。私自身は2010年よりこのプロジェクトに参加しており、今回で3回目の参加となりました。

ニンビン省は約90万人の人口を抱えるベトナムの省の一つであり、ハノイから南へ約100km紅河デルタ地方の南端に位置します。ハノイ遷都前の丁朝時代に都があった場所ですが、首都ハノイの目覚ましい発展をよそに、今もまだ牛車を時折見かけるのどかな町です。ニンビン省総合病院は省都であるニンビン市に位置しており、2010年に700床の病床を有する新病院へ移転しました。私はこの新病院でしか働いた事はありませんが、年々設備が整ってきている様に感じました。

今回のプロジェクトでは、私の他、愛知学院大学、大阪大学、韓国慶北大学、九州



大学、鳥取大学、高崎総合医療センターから口腔外科医8名、歯科麻酔医3名、歯学部学生1名の12名に加え、現地の通訳2名が参加しました。初日には再診患者を含む約70人の患者さんが診察に訪れ、半日かけて診察を行っているベトナムへ来た実感があります。患者さんの中には正中裂や全前脳胞症といっためずらしい症例の他、45歳の口蓋裂患者の様に日本ではなかなか診る事がない未治療の成人症例が毎年数人来院します。翌日からは、毎朝7時にホテルで朝食

食をとり、午前8時に救急車で病院へ移動し、手術を終えてホテルに戻ると午後8時頃という毎日でした。手術以外にも、私達口腔外科医は術後回診の他、器具の消毒・洗浄・滅菌のためのパッキング、歯科麻酔医は麻酔の準備や術前後の診察を行いながら、本プロジェクト中に30症例の手術を行いました。このような生活をしていると終盤になると疲労感たっぷりになるのですが、病棟回診中に患者さんや付き添いの人がとても感謝してくれる事により、疲労感が充実感に変わって無事に完遂出来たと感じています。また、海外で連日手術を行うという事は大なり小なりのハプニングが付きものですが、そ

んな中で安全・確実な治療を行うにはメンバー全員の協力が不可欠となります。日本での日常の診療でもチームワークが重要である事は当然の事ですが、このプロジェクトに参加する事でチームワークの重要性やチーム医療のすばらしさを実感する事が出来ました。

最後に、このプロジェクトへ参加する機会を与えていただいた森田学副病院長、飯田征二教授、そしてプロジェクトに携わる現地および日本のスタッフの皆様へ感謝致します。今後もこのような機会を与えていただければ、是非参加していきたいと思えます。



「『中国・四国広域がんプロ養成コンソーシアムがん治療認定医（歯科口腔外科）養成インテンシブコース』および『口腔がん検診研修会』を開催」

口腔顎顔面外科学分野
岸本 晃治

平成22年度より、岡山大学にて中国・四国広域がんプロ養成コンソーシアム、がん治療認定医（歯科口腔外科）養成インテンシブコースを年1～2回開催しております。本コースは、コンソーシアムに参加の中国・四国通域の口腔外科を専門とする歯科医師を対象として、口腔がんの診断・治療・研究に必要な基本的知識・技能に加え、高度で先進的ながん診療技術の習得を目的としています。最終的には日本がん治療認定医機構のがん治療認定医（歯科口腔外科）の養成を目標としています。そして、本年度より「地域で活躍するがん専門医療人養成インテンシブコース」の中に歯科口腔外科のインテンシブコースが含まれることになりました。したがって、口腔癌診療の面だけでなく歯科における多職種連携についての教育も重要であり、看護師、歯科衛生士、歯科技工士等の参加も配慮したプログラムに、本年度はなっております。

さらに、一般の歯科医師への教育も視野におき、本年度は、岡山市歯科医師会会員の先生方を対象に、口腔外科（再建系と病態系）のスタッフによる口腔がん検診研修会も開催しました。そして、その模様が山陽新聞に掲載されました。

岡山

第4回 がん治療認定医（歯科口腔外科）養成インテンシブコース

日 時：平成24年12月9日（日）9:00～15:30

場 所：岡山コンベンションセンター 2階レセプションホール

参加者：113名（内訳：歯科医師86名、看護師4名、歯科衛生士22名、歯科技工士1名）

講 演

座長 佐々木 朗 先生（岡山大学大学院医歯薬学総合研究科 口腔顎顔面外科学分野）

宮本 洋二 先生（徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部

統合医療創生科学部門 分子口腔医学講座 口腔外科学分野）

■教育講演1 「口腔癌術後の顎顔面補綴」

西川 悟郎 先生（岡山大学病院 咬合・義歯補綴科）

■特別講演「口腔癌に対する手術療法」

小村 健 先生（東京医科歯科大学大学院 顎口腔外科学分野）

■教育講演2

『医科歯科連携がん医療における口腔管理の意義と実際』

「徳島大学病院における口腔ケアの現状・概要と実際」

日野出 大輔 先生（徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部 保健科学部門 口腔保健学講座 口腔保健衛生学分野）

十川 悠香 先生（徳島大学病院 診療支援部 歯科衛生士）

「岡山大学病院における口腔管理への取り組み」

曾我 賢彦 先生（岡山大学病院 医療支援歯科治療部）



終了報告

今回のプログラムは、手術療法から顎補綴と口腔管理まで内容が多岐にわたっていたため、多くの歯科医師に加えて、看護師、歯科衛生士、歯科技工士の参加者もあった。そのため、参加者はこれまでの最高59名を大幅に上回る113名となり、大盛況であった。また、講演内容も充実しており、有意義なセミナーとなった。

口腔がん早期発見へ研修会 岡山市歯科医師会、岡山大病院と連携

山陽新聞岡山医療ガイド 4月9日(火)10時31分配信



(3月21日、岡山大病院にて)

口腔（こうくう）がんの撲滅に向け、岡山市歯科医師会は、歯科医院での検診能力向上を目指す研修会を開いている。専門医がいる岡山大病院と連携。最新の検診方法や代表的な症状を学び、日々の歯科診察の中で早期発見につなげる。

舌、粘膜など口の中にできる口腔がんは、食事や会話の障害となるほか、リンパ節や他の臓器に転移する場合もあり、国内の新規患者数は年間6千～7千人とされる。直接の視診と触診が可能なことから、初期に見つけて専門医に紹介できれば治癒率を高められる。

研修会は、岡山市北区鹿田町の同大病院で3月中、下旬に計2回開き、約10人が参加。口腔外科（病態系）の佐々木朗教授ら専門医が「口腔がんは発症しても痛みなどの自覚症状がほとんどなく、発見が遅れがちになる」と説明。模擬患者による実習では、発症の大半を占める舌や歯肉の腫れ、ただれといったがんの兆候を調べるための検診手順を紹介し、見落としやすい奥歯の周りや舌の下側などもチェックするよう助言した。

国が昨年、がん対策推進基本計画を見直し、関係者の一層の連携強化を打ち出したことなどを受け、同歯科医師会が病院に協力を依頼。今後も希望者を募り定期的に開いていくことにしている。

同歯科医師会の永澤正信会長は「市民の口の中に日常的に触れる歯科医だからこそ早期発見に貢献できる。知識と技術を高め、より頼れる存在になりたい」と話している。

「研修歯科医のキャリアデザインを考える」

岡山大学病院 総合歯科
鈴木 康司

歯科医師臨床研修が必修化され、7年が経過します。（原稿を書いている時点で）まもなく今年度の研修も修了し、あらたな研修歯科医との研修がスタートします。様々な大学から、研修歯科医が岡山大学に研修を受けにやって来ます。1年間という短い研修期間が修了すると、また様々なところへ就職していきます。毎年のことですが、3月になるとなんだか空しさのような気持ちを感じつつ、新年度の研修歯科医への期待もしつつというとても複雑な気持ちになります。またこの時期いつも思うことですが、この研修制度が若い歯科医師のためになっているのか、あるいは国民の求める歯科医師を養成できているのか、と自問自答する季節にしています。

この制度となってから研修歯科医は自身が望むか否かにかかわらず研修を受けることとなりました。すなわち、彼ら彼女らのキャリアデザインの中にこの制度が大きく影響を与えていることは否定できないと思います。我々指導医に求められることは、しっかりとしたキャリアデザインを持っている研修歯科医をいかにサポートし有意義な1年間のキャリアとすることができるかどうか、明確なキャリアデザインを描けていない研修歯科医に対して適切な道標を示してあげることができるかどうかだと考えています。また全ての研修歯科医に対して、医療の神髄を学び、社会貢献できる歯科医師となってもらうためには、どのようなキャリアが最善かを問い続けていきたいと考えています。幸い、本研修施設は歯学部併設された施設であり、各研究科がそれぞれに最先端の研究、臨床をされ、歯科医師としてのお手本が身近にあります。元金沢大学附属病院長の川崎先生は、「医師の喜びは二つある。その1は自分の医療によって健康を回復した患者の喜びがすなわち医師の喜びである。その2は世のため人のために役立つ医学的発見の喜びである。」と仰っています。さらに「その1の喜びは医師として当然の心構えである。これのみで満足せず、その2の喜びもぜひ体験したいという強い意志を培って欲しい。心の真の平安をもたらすのは、富でも名声でも地位でもなく、人のため世のために役立つ何事かを成し遂げたと思えるときなのだ。」と言葉を結ばれています。研修の1年間に有意義なプロセスとなるように、また生涯研修の第一歩としてこのことを是非とも研修歯科医に強く意識してもらいたいと思っています。

臨床系診療科の先生方には日頃から、並々ならぬご協力を賜り、この場をお借りして深く感謝申し上げます。今後ともより一層のご指導をよろしくお願い致します。



「H24年度 歯科衛生士室 活動報告」

歯科衛生士長 三浦 留美
歯科衛生士 池田 尚子

● 歯の衛生週間イベント報告

6月7日(木)に「歯ッスルフェア2012 ~キラキラスマイルで歯ッピーライフ~」を開催しました。これは毎年、6月4日~6月10日の歯の衛生週間にちなんで、当院が行っているイベントです。

【イベント内容】

- ・チェロとピアノの演奏会
- ・ミニ公開講座
「噛むこととアルツハイマー病」
予防歯科学分野 森田 学 教授
「こどもの歯 ~こんなときどうする?~」
小児歯科学分野 仲野 道代 教授
- ・歯科衛生士による 体験ブラッシング
- ・子供さんへのフッ素塗布
- ・歯科看護師による嚥下食の展示
- ・化学療法を受けている方への口腔相談
- ・ぬり絵コンテスト
- ・歯科診療科等の紹介パネルの展示



以上、お子さんから年配の方々まで楽しめる内容となっており、なかでも「チェロとピアノの演奏会」は、毎年楽しみにして来て下さる方も多く、今年は230名近くの聴衆に囲まれての演奏会となりました。

このイベントの目的は、
*市民の方々に広く岡山大学病院を知っていただく事

*歯科疾患の予防や、より専門的な歯科に関する知識を市民の方に得ていただく事にあります。来年度も是非たくさんの方々に参加いただけるよう願っております。

● 第33回岡山歯学会総会・学術集会の報告

平成24年11月25日（日）岡山大学病院歯科棟にて「第33回岡山歯学会総会・学術集会」が開催されました。プログラムの一環に毎年、歯科衛生士セッションも行っており、今年は「チーム医療シンポジウム」と称し『周術期における多職種の間わり』をテーマに、歯科医師・看護師・薬剤師・理学療法士・ソーシャルワーカー・歯科衛生士の6職種の先生方を招いて、手術を受けられる患者さんや他職種への間わりについて講演・シンポジウムを行いました。



中でも、当院「総合患者支援センター」の石橋京子ソーシャルワーカーのお話は、患者さんの視点に立った内容で、対象者は歯科衛生士を中心とした医療従事者でしたが、大変興味深く聞いて活発な意見交換が行われました。

● ベトナムにて歯科ボランティア活動に参加

H25年2月21日～24日の間、歯科衛生士 池田尚子が特定非営利活動DNOWの活動の一環としてベトナム(ホーチミン)にて歯科ボランティア活動に参加しました。対象はFFSC(FRIENDS FIRSTREET CHILDREN)と言うベトナムのNGO施設の児童です。

今回は前回と比べて人数は少なかったのですが、午前中にヘルスプロモーションと検診を行い、午後から治療が必要な子供たちの診療アシスタントをさせていただきました。

普段行っている診療とは違い、限られた物品のなかでの診療や改めて消毒の大切さなどチーム一丸となって学ぶことができた活動でした。

また、現地の子供達やボランティアスタッフの方々との交流ができ、すごく貴重な経験となりました。



「平成24年度技工室活動報告」

診療支援施設技工室
神 桂二

本年から運用開始となる総合診療棟の手術室の増設等に伴い、技工室で現在行っている3D医療用実体模型製作や周術期管理センターの手術支援製作業務等の増加が予想されることから歯科技工士が1名増員となり、昨年4月から宮崎文伸が特別契約職員として採用され技工室スタッフ数は8名となった。このような状況も踏まえ、益々、医科との連携業務の増加と歯科 本来の業務に対する「モノづくり」の迅速かつ総合的な対応が求められている。

第34回日本歯科技工学会学術大会において、大会長が窪木拓男歯学部長（技工室長）、準備・実行委員として技工室スタッフの全員が開催に協力し、6月15（土）・16日（日）に「歯科医療におけるパラダイムシフトと歯科技工」と題して岡山コンベンションセンター・ママカリフォーラムで開催された。技工室からはテーブルクリニック（竹内）とポスター（仲野）を発表した。歯科技工業務や歯科技工物製作方法の変革と潮流の中、大会には1,118名もの参加者が集まり大盛況であった。

また、11月の岡山歯学会総会・学術大会においては、地域貢献として昨今の若手歯科技工士の減少等を踏まえ、岡山県歯科技工士会と県内2校の歯科技工士養成学校と共同して歯科技工士セッションを開催した。演題①では「歯冠修復技工における歯科技工製作物の完成度アップのための一考察」、演題②では「CAD/CAM+3Dプリンターによる歯科技工の最適化」の講演をいただき、歯科技工士の学生を中心に82名の参加者を得た会場は熱気に包まれていた。

前述した周術期管理センターから依頼される手術支援製作業務は、歯牙損傷防止プロテクター作製を中心とする手術予定患者に対応した短い製作時間で特殊な「モノづくり」が多く、そのため多職種とチーム医療連携できる各分野の医学的知識が必要となる。

昨年に開設されたペリオ人材育成研修センターの岡山大学病院周術期チーム医療認定制度に、技工室スタッフ5名が研修生として参加し、岡山大学病院周術期チーム医療認定歯科技工士を目指し受講中である。

また、3D医療用実体模型製作では、平成18年から口腔外科（再建、病態）からの依頼を受け製作を開始し、その後整形外科、耳鼻科、形成外科、脳神経外科、麻酔科等の医学部診療科の手術支援を行ってきた。今年度から頭頸部癌センターの手術支援が加わり、その製作件数も毎年増加している。この業績に対し「技工室3D医療用実体模型作成支援グループ」が、「本院の医療・病院経営の改善、病院の充実、発展に秀でた貢献をしたと認められるため」として平成24年度岡山大学病院長賞（楷の木）を受賞した。

おわりに

岡山大学病院長賞を受賞できたことは、ひとえに関連診療科の皆様のお陰であると感謝しております。

今後とも、技工室は病院医療に対応した良質でスピーディーな最善の医療サポートを目指して行きたいと思っています。今後ともご教授ご支援を宜しくお願いいたします。



「編集後記」

皆様のおかげをもちまして「歯学だより vol.8」を無事発刊する事が出来ました。たいへんお忙しい中、ご執筆を下さいました諸先生方に改めて感謝いたします。また、今回の歯学だよりに掲載できなかった諸先生方・研修医・学生等の話題や各診療科・研究科のすばらしい活動がまだまだ多くあります。しかし、編集作業に限りがあり、すべてを掲載することができませんでした。心からお詫びいたします。さらに、これまで歯科系広報専門部会には基礎系の委員がいませんが、毎回いろいろとご協力を下さった基礎系の諸先生方にたいへん感謝しております。

広報誌編集委員長 岸本 晃治



歯科系広報専門部会（平成 24 年度 委員）

部会長	窪木 拓男
総合歯科	白井 肇
むし歯科	神農 泰生
歯周科	谷本 一郎
クラウンブリッジ補綴科	水口 一
咬合・義歯補綴科	黒田 知沙
口腔外科(再建系)	水川 展吉
口腔外科(病態系)	岸本 晃治
歯科麻酔科	樋口 仁
歯科放射線科・口腔診断科	此内 浩信
予防歯科	東 哲司
小児歯科	假谷 直之
矯正歯科	村上 隆
スペシャルニーズ歯科センター	森 貴幸
歯科衛生士室	高橋 明子
技工室	神 桂二
医療情報部	小河 達之